

出雲ジュンテンドー敷地造成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

高岡遺跡



2000年3月

出雲市教育委員会

高岡遺跡報告書正誤表

頁	行	図	誤	正
15	-	-	右上隅「高岡遺跡1区」	高岡遺跡3区
45	15	-	調査区東壁端面	調査区東壁断面

出雲ジュンテンドー敷地造成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

高岡遺跡

2000年3月

出雲市教育委員会

序

このたび、出雲ジュンテンドー敷地造成事業に伴う高岡遺跡発掘調査を実施しましたところ、出雲平野では発見例の少ない、平安時代と中・近世の水田跡と考えられる遺構が検出されました。

これにより、弥生時代から今日に至るまで連続と受け継がれてきた、水稲耕作の一端をうかがい知る上で不可欠な資料を追加できたことは、貴重な成果と言えます。

この成果を、出雲平野の農耕社会に関する理解や歴史学習などの一助にいただければ幸いです。

今後とも、地元の皆様の熱意により、後世にこの遺跡を伝え、また、この成果が広く活用されることを期待するとともに、発掘調査及び本書を発刊するにあたり、ご協力を賜りました株式会社ジュンテンドーをはじめ関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成12年(2000)3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

例 言

1. 本書は株式会社ジュンテンドーの依頼を受けて、出雲市教育委員会が平成10年度から平成11年度にかけて実施した出雲ジュンテンドー敷地造成事業に伴う高岡遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査地は次のとおりである。
高岡遺跡（出雲市遺跡地図C 05） 島根県出雲市高岡町1270, 1271, 1272, 1281, 1282,
1283-1, 1283-2, 1284
3. 発掘調査は、平成11年1月6日に着手し、平成11年4月20日に終了した。
4. 調査組織は次のとおりである。
調査主体 出雲市教育委員会
事務局 出雲市教育委員会 文化振興課
調査指導 守岡正司（島根県教育委員会 文化財課 主事）
調査担当者 三原一将（文化振興課 副主任主事）
調査補助員 羽木伸幸、伊藤めぐみ、佐々木紀明（文化振興課 臨時職員）
5. 本書の執筆・編集は三原が行ったが、第5章と第6章では渡辺正巳（文化財調査コンサルタント）、大塚奈介（島根大学汽水域研究センター）の両氏から玉稿を賜った。
6. 本書で使用した方位は真北を示す。
7. 遺物の出土量を示すために用いたコンテナは、L540mm×W340mm×H150mm、ビニール袋はL380mm×W260mmのものである。
8. 報告書作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言をいただいた。記して謝意を表しておきたい。（敬称略）
田中義昭（元島根大学教授）、西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）
9. 遺物の写真撮影は三原が行ったが、鉄製品のX線写真については島根県埋蔵文化財調査センターに依頼した。
10. 発掘調査、遺物整理、報告書作成については、次の方々の協力を得た。
発掘調査 伊藤悟郎、岩田和子、奥田広信、恩田洋平、片山 修、鎌田 悟、
田中二三、中島三恵子、中野治夫、福田雅美、宮崎 綾、米山清司
遺物実測 村田理恵、竹田章乃
遺物整理 小村睦子、園山美千代
編集補助 羽木伸幸
11. 本遺跡の出土遺物、実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

写真図版目次

第1章	位置と環境	1
第2章	調査に至る経緯	3
第3章	調査の概要	4
第4章	遺構と遺物	
	1. 1区の遺構と遺物	7
	2. 2区の遺構と遺物	11
	3. 3区の遺構と遺物	19
第5章	高岡遺跡における花粉およびプラント・オパール分析	33
第6章	出雲市高岡遺跡から得られた埴塚遺骸群集に基づく古環境の推察	40
第7章	まとめ	45
	土器観察表	47
	鉄製品観察表	49

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 章 位置と環境

第 1 図 高岡遺跡位置図 (1:100,000) …… 1

第 2 図 高岡遺跡と周辺の遺跡 (1:8,000) …… 2

第 3 章 調査の概要

第 3 図 調査区配置図 1 (1:2,000) …… 4

第 4 図 調査区配置図 2 (1:2,500) …… 5

第 5 図 調査区配置図 3 (1:500) …… 6

第 4 章 遺構と遺物

1. 1 区の遺構と遺物

第 6 図 高岡遺跡 1 区遺構配置図 (1:50) 9・10

第 7 図 1 区出土土師器・須恵器実測図 (1:3) …… 8

2. 2 区の遺構と遺物

第 8 図 高岡遺跡 2 区遺構配置図 (1:80) 13～16

第 9 図 2 区調査最終状況図 (1:220) …… 12

第 10 図 2 区出土土師器実測図 (1:3) …… 17

第 11 図 2 区出土須恵器実測図 (1:3) …… 17

第 12 図 2 区出土陶磁器実測図 (1:3) …… 18

第 13 図 2 区出土鉄製品実測図 (1:2) …… 18

3. 3 区の遺構と遺物

第 14 図 高岡遺跡 3 区遺構配置図 (1:80) 21～24

第 15 図 3 区畦畔強調図 (1:100) …… 25・26

第 16 図 3 区遺構断面ライン配置図 (1:180) …… 27

第 17 図 3 区遺構断面図 1 (1:50) …… 28

第 18 図 3 区遺構断面図 2 (1:50) …… 29

第 19 図 3 区遺構断面図 3 (1:50) …… 30

第 20 図 3 区調査最終状況図 (1:220) …… 31

第 21 図 3 区出土土師器・陶磁器実測図 (1:3) …… 32

第 22 図 3 区出土鉄製品実測図 (1:2) …… 32

第 5 章 高岡遺跡における花粉およびプラント・オパール分析

図 1 調査区配置 …… 33

図 2 1 区の花粉ダイアグラム …… 37

図 3 2 区の花粉ダイアグラム …… 38

図 4 1 区のプラント・オパールダイアグラム …… 39

図 5 2 区のプラント・オパールダイアグラム …… 39

写真図 版 目 次

- | | |
|--|---|
| <p>表紙 高岡遺跡調査区全景：稲岡遺跡、島根半島を望む（南から）</p> <p>図版1 高岡遺跡調査区全景（上から）</p> <p>図版2 高岡遺跡1区全景（上から）</p> <p>図版3 高岡遺跡2区全景（上から）</p> <p>図版4 高岡遺跡3区全景（上から）</p> <p>図版5-1 1区調査着手状況（西から）
2 1区調査風景（南東から）</p> <p>図版6-1 1区遺構検出状況（東から）
2 1区完掘状況（東から）</p> <p>図版7-1 1区遺構検出状況：SW03付近（北から）
2 1区遺構完掘状況：SW03付近（北から）</p> <p>図版8-1 1区遺構検出状況：SW10付近（北から）
2 1区遺構完掘状況：SW10付近（北から）</p> <p>図版9-1 1区遺構完掘状況：平坦面付近（北から）
2 1区完掘状況（西から）</p> <p>図版10-1 2区調査着手状況（南から）
2 2区調査風景（南西から）</p> <p>図版11-1 2区畝状遺構検出状況：A1・B1Gr付近（南から）
2 2区畝状遺構検出状況：A1・B1Gr付近（南から）</p> <p>図版12-1 2区畝状遺構検出状況：A1・B1Gr付近（西から）
2 2区畝状遺構検出状況：A5・B5Gr付近（西から）</p> <p>図版13-1 2区土師器(10-7)出土状況(上から)
2 2区須恵器(11-11)出土状況(上から)</p> <p>図版14 2区堆積土サンプリング状況：調査区東壁北端付近（西から）</p> <p>図版15-1 2区完掘状況（南から）
2 2区完掘状況（北から）</p> <p>図版16-1 3区調査着手状況：重機掘削後(西から)
2 3区調査風景（北東から）</p> | <p>図版17-1 3区遺構完掘状況：大畦畔1付近(北から)
2 3区遺構完掘状況：大畦畔2付近(北から)</p> <p>図版18-1 3区畦畔断面(C1-C2)：ラミナ構造
2 3区畦畔断面(C4-C5)：ラミナ構造</p> <p>図版19-1 3区大畦畔2断面(C6-C7)：ラミナ構造
2 3区畦畔断面(B9'-C9')：ラミナ構造</p> <p>図版20-1 3区磁器(21-4)出土状況(南から)
2 3区陶器(21-5)出土状況(南から)</p> <p>図版21-1 3区完掘状況（西から）
2 3区完掘状況（東から）</p> <p>図版22-1 ラジコンヘリによる空中写真撮影風景
2 発掘調査参加者</p> <p>図版23-1 1区出土土師器・須恵器
2 2区出土土師器</p> <p>図版24-1 2区出土須恵器
2 2区出土陶磁器</p> <p>図版25-1 2区出土磁器
2 3区出土土師器・陶磁器</p> <p>図版26-1 2区・3区出土鉄製品
2 2区・3区出土鉄製品：X線写真</p> |
|--|---|

第1章 位置と環境

高岡遺跡は、出雲平野北東部の微高地に位置する。出雲平野は斐伊川・神戸川の沖積作用により形成された沖積平野であるが、高岡遺跡が占地する微高地は、斐伊川がかつて西流し日本海に注いでいた際に形成された自然堤防と考えられ、東には稲岡遺跡が隣接して存在する。

高岡遺跡の存在は、1985年に組織された「出雲平野集落遺跡研究会」などによる踏査の結果明らかになった。同会は斐川町の荒神谷遺跡から青銅器の大量発見があったのを契機に組織され、出雲平野で広範囲にわたる踏査を実施した結果、1987年までに出雲市高岡町付近で計7箇所遺物散布地を発見している。出雲市教育委員会はこの結果をもとに、1993年に「出雲市遺跡地図」を発刊するにあたり、これらをまとめて高岡遺跡として周知している。



第1図 高岡遺跡位置図 (1:100,000)

高岡遺跡の出現期については、同会が採取遺物から弥生時代後期頃から集落が営まれるようになったと推測している。出雲平野に本格的に人が進出するのは、弥生時代中期頃であるが、高岡遺跡ではこれまでの採取遺物から推測する限りでは、若干出現が遅れているようである。古墳時代には高岡遺跡の北約2kmに迫る鳥根半島の山麓付近に大寺古墳などが築かれるが、この頃の高岡遺跡周辺の様子は、同時代の遺構などが検出されていないため分かっていない。奈良時代の高岡遺跡周辺は、733年に編纂された「出雲国風土記」によると、「神門郡塩冶郷」の北部に位置していたことがうかがえる。中世の遺跡としては、毛利元就によって尼子氏攻略の拠点として築かれた山城と考えられる鳥ヶ巣城跡が北山山地に残り、詳細は不明であるが、廻城と呼ばれる館が高岡遺跡付近に存在していたようである。



第2回 権限区域整備論と周辺の整備 (1 : 8,000)

また、高岡遺跡から約900m東の荻村古墓からは、中国南宋の龍泉窯産である青磁の碗と皿が出土し重要文化財に指定されている。

今回の調査地は周知の高岡遺跡から南東に600m、稲岡遺跡から南に250m離れた、後背低地上の地点であったため、これらの遺跡、特に稲岡遺跡に存在していた集落の水田などに利用されていた可能性がその位置環境からも容易に想像できる。

引用・参考文献

- 鳥根県教育委員会ほか 『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』 1980
出雲考古学研究会 『古代の出雲を考える3 出雲平野の集落I』 1983
田中義昭・西尾克己 「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』第4号 鳥根大学山陰地域研究総合センター 1988
出雲市教育委員会 『出雲市遺跡地図』 1993
加藤義成 『修訂出雲国風土記参究』 今井書店 1997

第2章 調査に至る経緯

平成10年(1998)3月17日付けで、鳥根県知事より開発協議通知書を受けた株式会社ジュンテンドーは、文化財保護についての指導事項に基づき、平成10年4月10日付けで埋蔵文化財試掘調査を出雲市教育委員会に依頼した。この依頼を受け平成10年5月18日から20日にかけて出雲市教育委員会が試掘調査を実施した結果、主に事業予定地北寄りで平安時代頃の土器片を出土する水田跡と考えられる遺構を検出した。事業予定地北寄りには店舗建設予定地であり、そのまま計画を進める場合は広範囲にわたり遺跡が消滅するため、協議の結果、店舗を遺構のない事業予定地南寄りに配置し、それでもなお遺跡の範囲に重なる箇所のみ調査を実施することとした。これにより、平成10年12月21日付けでジュンテンドー側から発掘調査の依頼を受けた出雲市教育委員会は、受託事業として平成11年(1999)1月6日から平成11年4月20日まで現地発掘調査を実施した。

なお、文化財保護法に基づく主な書類などについては、下記のとおり提出された。

平成10年12月8日「遺跡発見の届出について」(株)ジュンテンドーから出雲市教育委員会へ

平成10年12月8日「埋蔵文化財発掘の届出について」(株)ジュンテンドーから出雲市教育委員会へ

平成11年1月27日「埋蔵文化財発掘調査の報告について」出雲市教育委員会から鳥根県教育委員会へ

平成11年2月26日「高岡遺跡1区発掘調査概報の提出について」出雲市教育委員会から鳥根県教育委員会へ

平成11年3月16日「高岡遺跡2区発掘調査概報の提出について」出雲市教育委員会から鳥根県教育委員会へ

平成11年4月12日「埋蔵文化財発掘調査の報告について」出雲市教育委員会から鳥根県教育委員会へ

平成11年4月20日「高岡遺跡3区発掘調査概報の提出について」出雲市教育委員会から鳥根県教育委員会へ

平成11年5月6日「埋蔵文化財保管証の提出について」出雲市教育委員会から鳥根県教育委員会へ

第3章 調査の概要

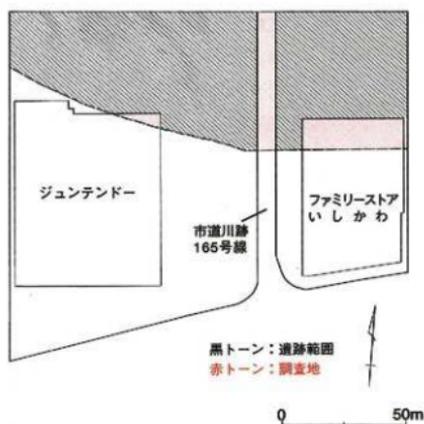
出雲ジュンテンドー敷地造成事業においては、出雲ジュンテンドー店舗、市道川跡165号線、ファミリーストアいしかわ店舗建設予定地のうち、事業予定地北寄りの遺跡に重なる部分が発掘調査の対象となった。出雲ジュンテンドー店舗新設予定地を1区(49㎡)、市道川跡165号線改良予定地を2区(357㎡)、ファミリーストアいしかわ新設予定地を3区(429㎡)とし、事業の工程と歩調を合わせるため、1区から順に調査を着手・完了していくこととした。いずれの調査区も試掘調査のデータをもとに、遺跡に影響のない深さまでは重機により掘削し、それ以降は手掘りで調査を進めた。

1区は出雲ジュンテンドー店舗新設予定地の北東角を遺跡がかすめているため、平面形が直角三角形の調査区となった。基準杭の設置については、まず、西角にA1を設定し、東に5mピッチでA4まで設定した。次に、それぞれのAラインの杭から南に2m、3m、4mの地点にB2、B3、B4を設置した。また、杭によって囲まれる部分をグリッドとし、北西角に位置する杭の名称をそのグリッドの名称とした。標高3.15m付近で水田跡と考えられる遺構を検出し、少量の遺物も出土した。

2区は事業予定地内のほぼ中央を南北に伸びる市道川跡165号線改良予定地のうち、北寄りの区間が調査の対象であり、東西7m×南北51mの長方形の調査区である。基準杭の設定は、まず、調査区中央にBラインを南北に想定し、南から5mピッチで順にB1～B11を設定した。次に、Bラインの西にAライン、東にCラインを2.5m間隔で平行に設定し、Bラインと同様にA1～A11、C1～C11を設定した。また、南西に位置する杭をグリッド名として用いている。標高3.30m前後で畝状遺構を検出したためこの面で調査を実施し、少量の遺物も出土した。

3区はファミリーストアいしかわ店舗新築予定地のうち、北寄りの東西40m×南北11mの長方形の部分調査対象である。基準杭の設定は東西に5m間隔で平行に北からA～Cライン、南北に5m間隔で平行に西から1～9ラインを想定し、直交点にそれぞれのライン名をあわせA1、B2などの基準杭を設置し、グリッド名には北西角の杭の名称を用いた。標高3.35m前後で畦畔状の遺構を検出したため、この面で精査を行ったところ、水田跡と思われる区画を多数検出し、遺物も少量出土した。

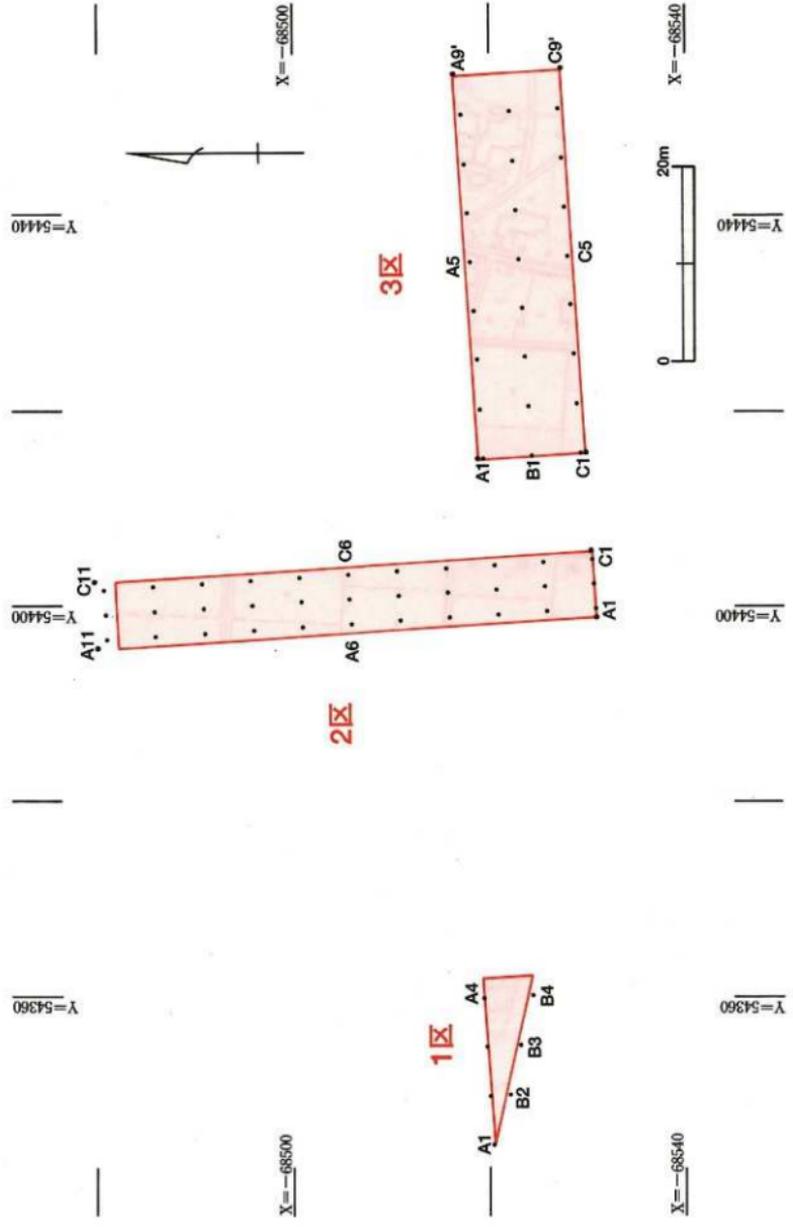
いずれの調査区も、一部グリッドの検出面以下の精査を行い、遺構がないことを確認し調査を打ち切った。



第3図 調査区配置図1 (1:2,000)



第4図 調査区配置図2 (1:2,500)



第5図 調査区配置図3 (1 : 500)

第4章 遺構と遺物

1. 1区の遺構と遺物

1区の土層の順序は上層から1褐色粘質土層（耕作土）、2暗青灰色粘質土層（耕作土）、3灰色粘質土層、4灰色シルト層、5黒褐色粘質土層、6黄灰色粘土層（地山）、7黄灰色粘質土層、8黄灰色粘土層である。遺構は6黄灰色粘土層（地山）上面の標高3.15m付近で検出した。出土遺物は須恵器・土師器の小片がほとんどで、遺構検出面直上、つまり、6層・7層直上で、一部はめり込んだ状態で出土しているものの、その他は包含層からの出土である。

水田遺構（第6図）

検出した遺構は水田遺構と考えられ、小区画を10区画確認した。これらを検出したグリッドはA1グリッド東寄りから3グリッド西寄りまでの区間であり、3グリッド東寄りから4グリッドにかけては平坦面が広がっているが、水路などは確認していない。検出した範囲では、小区画は東西に伸びる畦畔を軸にし線対称に存在する。よって、畦畔のみを観察すると、南北と東西のそれはほぼ直交し「十字」状を呈している。また、畦畔断面は不整な台形状であり、裾が広がる。検出した高さは8cm～17cmであり削平を受けている可能性もあるが、幅を勘案すると本来のものとあまり差がないと考えられる。板や杭などで畦畔を補強した痕跡は見あらず、地を掘り下げる作業過程で畦畔を形成したと思われる。また、水を張るために畦畔を切った痕跡なども見つからない。

小区画の規模については、調査区の幅が狭く全体を検出できた区画がないため不明な点が多いが、検出規模や出土遺物については表1に示すとおりである。小区画の底には複数の窪みが観察され、足跡などである可能性は否定できないが、柔らかな粘土上での検出であったため、精査には至っていない。

遺構名	検出規模 (cm)	出 土 遺 物
SW01	L65以上×W108以上×H16	覆土中から土師器のごく小片5点
SW02	L25以上×W100以上×H11	覆土中から7-3が出土
SW03	L83以上×W205×H13	無し
SW04	L83以上×W195×H11	覆土中から土師器・須恵器のごく小片計2点
SW05	L93以上×W180×H9	無し
SW06	L118以上×W193×H8	覆土中から土師器のごく小片1点
SW07	L143以上×W188×H17	覆土中から土師器・須恵器のごく小片計8点
SW08	L100以上×W165×H16	覆土中から土師器・須恵器のごく小片計7点
SW09	L200以上×W150×H13	覆土中から土師器・須恵器の小片計5点
SW10	L113以上×W180×H9	覆土中から土師器のごく小片計2点

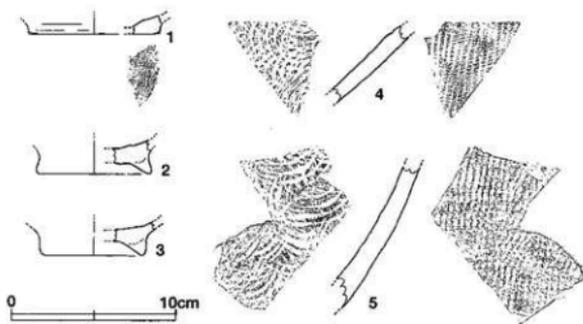
*L(長さ)×W(上幅)×H(高さ):深さについては取り囲む畦畔と底の平均標高の差を記載した。

3グリッド東寄りから4グリッドにかけての平坦面上は、精査の結果遺構は検出していない。調査地付近は平地であるため本来棚田であったものが削平された結果生じた平坦面である可能性はない。おそらく、田にアプローチするための空間と考えられる。

出土遺物（第7図）

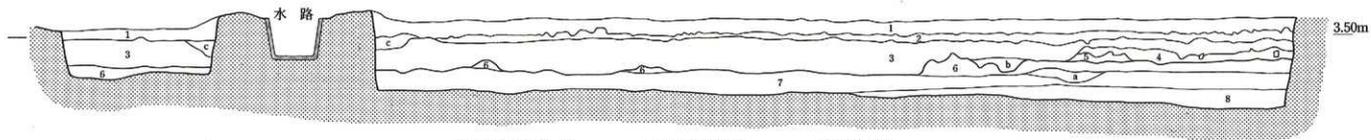
出土遺物は少なく、1区全体でビニール袋1袋分に満たない。遺物を出土する層は5黒褐色粘質土層以上で、6黄灰色粘土層以下から出土することはなかった。出土遺物は土師器・須恵器片であり、土師器片が大半を占める。いずれもごく小片であり、実測に耐えるものは図に示す5点を数えるに過ぎない。

7-1~7-3は土師器、7-4・7-5は須恵器である。7-1は平底の坏の底部片である。底面の観察から、底部切り放しは回転糸切りによると考えられる。7-2は6層直上で出土した高台付坏の底部片である。底面に断面三角形を呈する高台を末広がり貼り付け、上げ底状に仕上げている。7-3はSW02の覆土中から出土した高台付坏の底部片である。先細りの断面を呈する高台は、底面に末広がり気味に貼り付けられており、上げ底状を呈している。7-4・7-5は大型甕の胴下方部片と思われる。ともに内面に当て具による同心円状のオサエ痕が認められるが、外面のタタキ目は、前者が平行タタキ目であるのに対し、後者は格子状を呈している。

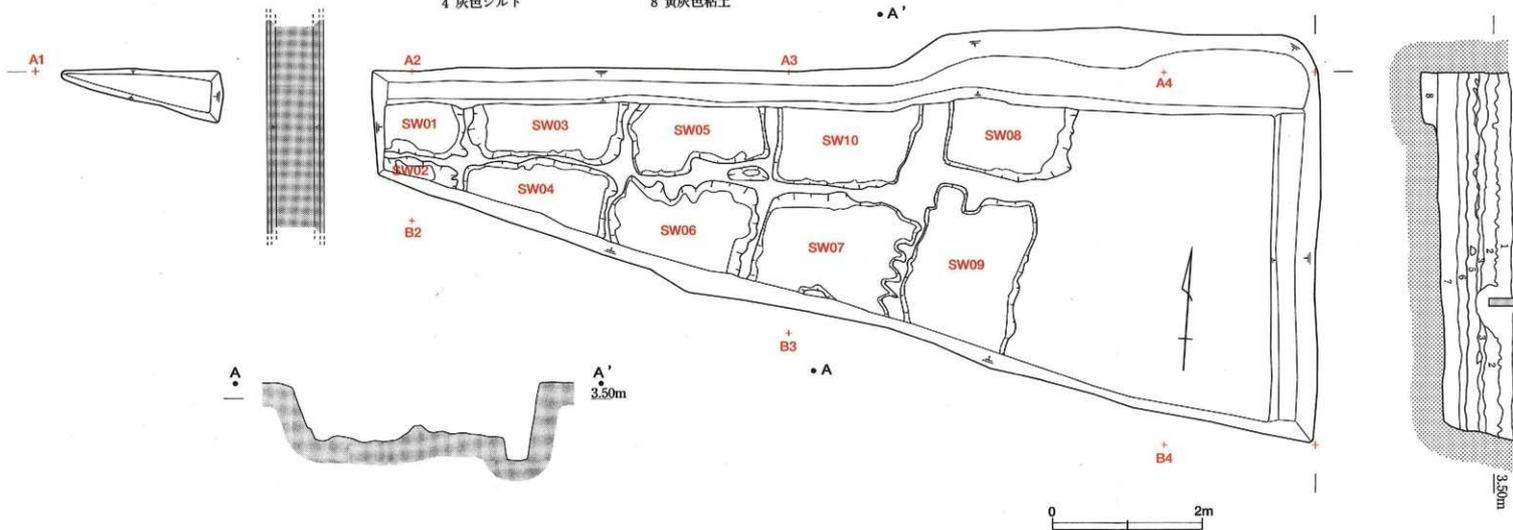


第7図 1区出土土師器・須恵器実測図（1：3）

6層直上から出土した7-2や5層中から出土した7-3の時期は平安時代と考えられ、その他のものも同時期頃の所産と思われる。調査範囲が狭く、また、出土遺物も少量かつ小片であるため明言はできないが、出土遺物から推測する限り、遺構の時期は平安時代と考えられる。



- | | | |
|----------------|----------|---------------|
| 1 褐色粘質土(耕作土) | 5 黒褐色粘質土 | a 黒褐色粘質土 |
| 2 暗青灰色粘質土(耕作土) | 6 黄灰色粘土 | b 灰色粘質土 |
| 3 灰色粘質土 | 7 黄灰色粘質土 | c 灰黄褐色粘質土(攪乱) |
| 4 灰色シルト | 8 黄灰色粘土 | |



第6図 高岡遺跡1区遺構配置図(1:50)

2. 2区の遺構と遺物

2区の土層の層序は上層から1にぶい黄褐色粘質土層（耕作土）、2オリーブ黒色粘質土層（耕作土）、2'オリーブ黒色粘質土層（耕作土）、3灰色砂層、4欠番、5黒褐色粘土層、6黒褐色粘土層（地山）、7黄灰色粘土層、8黄灰色砂層、9黄灰色粘土層である。これ以下は掘削が困難であり、土層断面の観察は行っていないが、標高1.75m付近には砂層が広がっているようである。遺構は3層掘削中に標高3.3m～3.4m付近で畝状遺構を検出した。また、部分的に6層上面で遺構検出に努めたが、遺構は検出できなかった。出土遺物は土師器・須恵器の小片がほとんどで、3層から6層直上まで出土しており、6層直上からの出土が比較的多かった。

畝状遺構（第8図）

A8・B8グリッド以南で複数の畝状遺構を検出した。検出面の土が柔らかく精査には至っていないが、これらの畝状遺構の検出規模は上幅は10cm～40cm程度、長さ20cm～360cm程度と様々で、小規模なものは鳥状を呈している。断面は不整な台形状を呈しており、裾が広がっている。これら畝状遺構のうち、比較的長く方向が確認できるものに着目すると、概ね東北東方向と北北西方向の2方向であることが観察できる。また、鳥状に点在する小規模なものも、この2方向のものの延長線上にくるものが数基認められる。これらのことから、これらの畝状遺構は本来、格子状に存在していたが、後世に何らかの影響で破壊されたものと推定できる。

6層以下の調査（第9図）

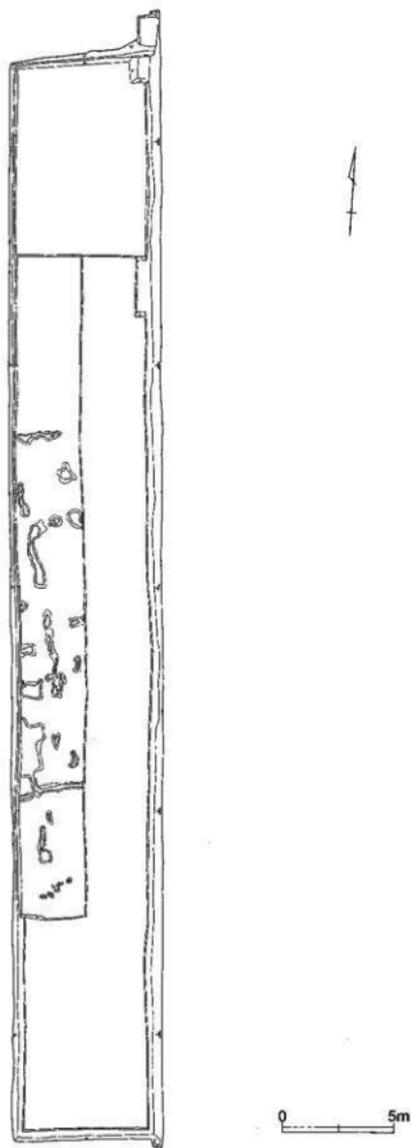
2区の6層は水田遺構を検出した1区の6層と対応すると考えられたため、上面を精査し遺構の検出に努めた。その結果、遺物は6層上面あるいは若干めり込んだ状態で出土するものの、遺構は検出できなかった。当初は調査区の範囲で全面6層上面まで掘り下げる予定であったが、途中で遺構が検出できる見込みがないと判断したため、部分的な掘削にとどまっている。なお、6層上面で精査を行ったグリッドは、A3～A8グリッドを除く全グリッドである。

9ライン以北においては6層の掘削を行い、6層中の遺物の有無を確認したが、遺物は検出されなかった。さらに、調査区東壁沿いに設定したサブレンチは6層以下まで達しているがここからも遺物は出土していないため、6層以下に遺物はないと判断した。

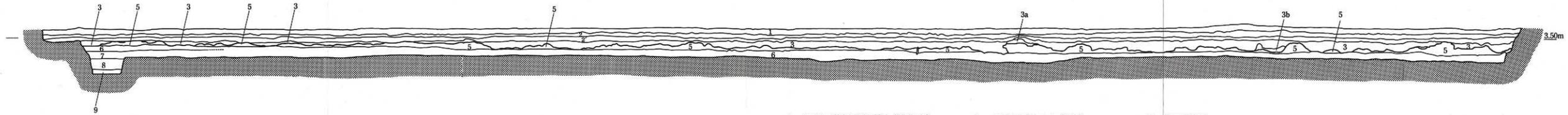
また、B10グリッドの北東角を標高2.3mまで掘削し、7層以下について遺構・遺物の有無の確認に努めたが、遺物は出土せず、遺構については観察による検出が困難であったため、サンプル土を採取し微化石分析の結果に委ねた。

標高2.3m以下は掘削が困難であったため、ピンボールを突き刺しそれ以下の堆積土の様子をつかもうと試みた結果、標高1.75m付近で砂の感触が得られ、同時にわき水が吹き出した。この水に混ざり先の砂も流れ出たためサンプルとして採取し、鑑定したところ斐伊川の沖積作用により運搬された花崗岩の砂であることが判明した。このことから、この辺りでは標高1.75m付近に、出雲平野の基盤ともいえる砂層が広がっていると思われる。

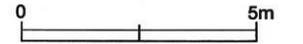
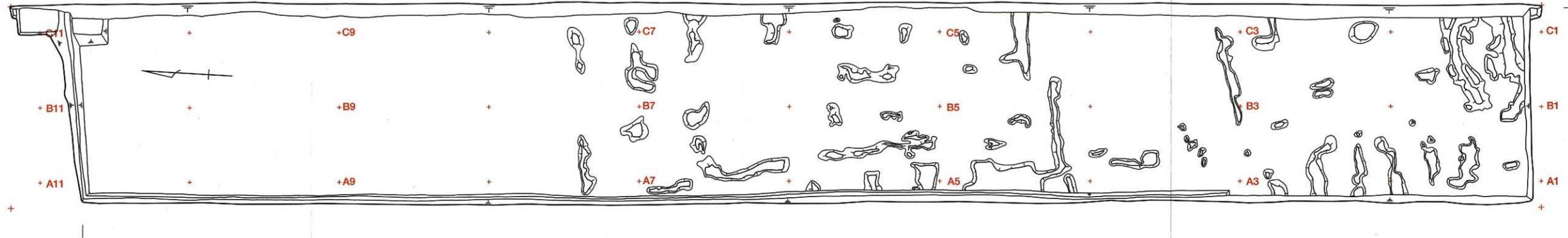
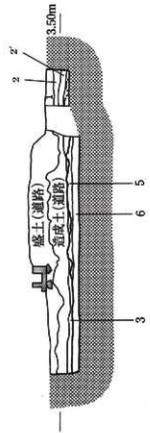
註）中村唯史氏の鑑定による。



第9図 2区調査最終状況図 (1:220)



- | | | |
|------------------|------------------|---------|
| 1 にぶい黄褐色粘質土(耕作土) | 3a 灰色砂(ラミナ構造) | 7 黄灰色粘土 |
| 2 オリーブ黒色粘質土 | 3b 灰色砂(粘土ブロック含む) | 8 黄灰色砂 |
| 2' オリーブ黒色粘質土(暗い) | 5 黒褐色粘土 | 9 黄灰色粘土 |
| 3 灰色砂 | 6 黒褐色粘土(暗い) | |



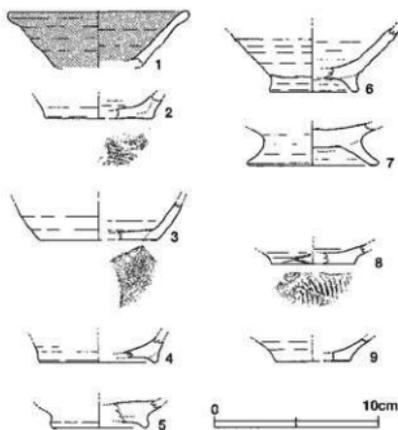
第8図 高岡遺跡 2区遺構配置図 (1:80)

出土遺物 (第10~13図)

2区の出土遺物のほとんどは土師器片であるが、その他に須恵器、陶磁器片、鉄器、木片、炭も出土している。遺物の量は少なく全体でコンテナ1箱分に満たない。これらは主に遺構を覆う3層、遺構を形成する5層、遺構の下に堆積する6層直上からの出土であり、6層直上からの出土量が比較的多い。

土師器 (第10図)

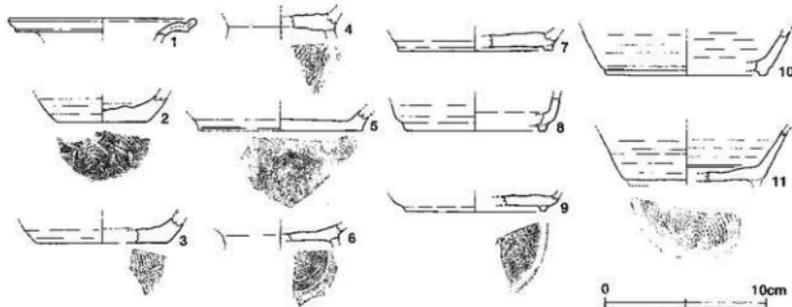
土師器は3層から6層直上までで出土し、6層直上からの出土量が最も多い。磨滅した小片がほとんどであり、実測可能なものは少なく図に示す9点を数えるに過ぎない。10-1~10-7は坏であり、10-8・10-9は皿と考えられる。10-1は器壁が外反気味に開口し、内外面に赤色塗彩が施されている。9世紀後半の所産と思われる。10-2は底面に回転糸切り痕が残る。その際のみ出した粘土が体部に附着したままの雑な調整である。10-3の器壁は内湾気味に立ち上がる。底部の切り放し痕は風化のため不明瞭である。10-4は底面外縁に高台を貼り付けている。10-5は厚い底面に「ハ」字状に開く高台を有する。10-6・10-7はいずれも高台を有し、器壁は直線的に広く開口する。両者とも11世紀頃の所産と思われる。10-8と10-9は底部を強くナデつけ絞っている。前者には回転糸切り痕が明瞭に残っている。



第10図 2区出土土師器実測図 (1:3)

須恵器 (第11図)

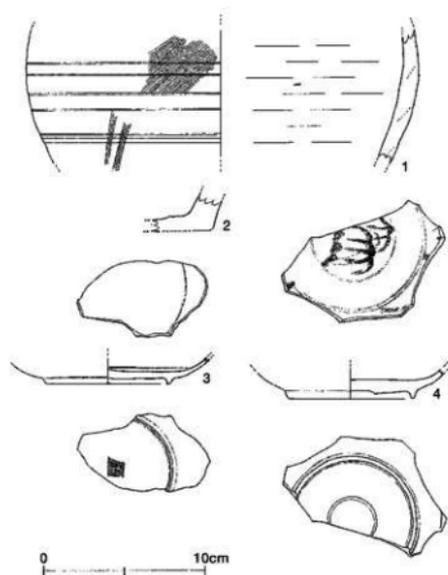
須恵器片の出土量は少なく、図化に耐えうるもの以外は壘胴部の小片など20点程度を数えるに過ぎない。11-1と11-2は壘の口縁部と底部片と思われる。後者の底面には回転糸切り後ナデ調整が施さ



第11図 2区出土須恵器実測図 (1:3)

れている。11-7~11-11は底面外縁に低い高台が貼り付けられ、器壁の立ち上がりはやや急である。いずれも高広IV期の範疇に収まるものと考えられる。

少ない資料数ではあるが、2区から出土した須恵器は奈良時代から平安時代にかけてのものが中心であり、古墳時代に遡るものは見受けられない。土師器についても同様で、今回の調査地の上限期を示すものと考えられる。



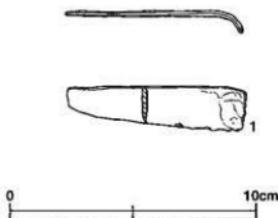
第12図 2区出土陶磁器実測図 (1:3)

陶磁器 (第12図)

陶磁器は5層以上で少量出土しており、図示したものを以外に小片が数点確認されている。12-1は備前焼の壺胴部片である。5層から出土しており、遺構の上限期を示すと思われる。12-2器種は不明であるが底部付近の破片である。底部に比較し器壁は薄く、外反気味に立ち上がっている。12-3は輸入磁器と思われる。灰白色に施釉され、内面の底部と体部の境付近及び高台の付け根外側に1条の線を染め付ける。また、底部外面には文様を画く。16世紀後半の所産と思われる。遺構を覆う3層から出土していることから、畝状遺構の下限期を示す遺物と考えられる。12-4は肥前系磁器と思われる。灰白色の釉薬を施しており、底部内面中央に笹状の文様を配し、同心円状に線を巡らす染め付けが観察される。18世紀の所産であろう。

鉄製品 (第13図)

6層上面からは13-1に示す小型の直刃鎌と思われる鉄製品が1点出土している。身幅は先端に近づくに従い狭まり、使用のために先端付近で刃部がやや磨滅する。また、柄部は身をゆるく湾曲させている。



第13図 2区出土鉄製品実測図 (1:2)

註) 鳥根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書一和田団地造成工事に伴う発掘調査一』1984年

3. 3区の遺構と遺物

3区は2区の東10m隔てた箇所に配した調査区であるが、比較的遺構の残りがよく、調査においてより詳細なデータが得られている。

層序は上層から1 灰黄褐色粘質土層、1' オリーブ黒色粘質土層（耕作土）、2 オリーブ黒色粘質土層（耕作土）、2' オリーブ黒色粘質土層（耕作土）、3 灰粘質土層他、4 欠番、5 黒褐色粘土層、6 黒褐色粘土層（地山）であり、2区と対応すると考えられる。標高3.2m～3.4mで5層により形成される遺構を検出しているが、6層以下には遺構は検出できなかった。遺物については6層直上以上で出土している。

水田遺構（第14～19図）

検出した遺構は水田遺構と考えられ、多数の小区画と大区画の一部を検出した。

小区画は1.2m×2.0m程度の不整な長方形を呈しており、N-22°-W及びN-68°-Eに伸びる小畦畔により形成されている。特徴として前者は直線的に伸びるのに対し、後者は断続的である点が指摘できる。これは両者の交点が「鍵十字」状に形成されているためである。この構造は水流が分岐し水利に有効であると同時に、畦畔が決壊しにくいという利点を持つ。したがって、田に水を張る際には、N-68°-E畦畔に沿って流れたと推定できる。

他の区と異なり、検出面が比較的締まっていたため小区画の底面では精査を行った。大小の凹凸が存在し平坦でない様子が観察できたが、足跡の検出には至っていない。

また、調査区中央の4ライン～6ライン間付近では、大畦畔1～大畦畔3による大区画も一部確認できた。大畦畔の伸びる方向は小畦畔と同様N-22°-W及びN-68°-Eであり、大畦畔1～大畦畔3により形成される大区画内には、25区画以上の小区画が検出されている。大畦畔1と大畦畔2の間隔は9.8mを測り、小区画に比べ整然と区画されている様子がうかがえる。

調査時にはその存在に気づかず掘り進んでしまったが、調査区南壁セクションを観察すると、検出面より上位から畦畔が存在していたことが確認できた。検出面上位の畦畔には、幾層かの灰色砂層が堆積しており、大畦畔で顕著に観察できる。この砂層にはラミナ構造が確認できることから、洪水による堆積と考えられる。畦畔が築かれたのは洪水による砂層の堆積後であり、この砂層上位から5層に至る掘削により形成されている。したがって、畦畔断面を観察する限り、区画を掘り下げた際に生ずる掘削土を周りに盛る手法の畦畔形成を行っていない。断面形は山形あるいは台形状を呈しており、検出面での上幅は大畦畔で約80cmで小畦畔はその半分以下である。

遺構の覆土は3c層と名付けた灰色砂である。この層は5層や質の異なる砂、あるいは不純物を含み、ラミナ構造も認められないことから、人工的な埋土である可能性が高い。

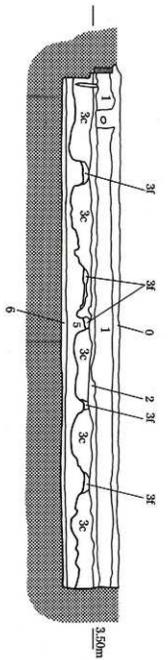
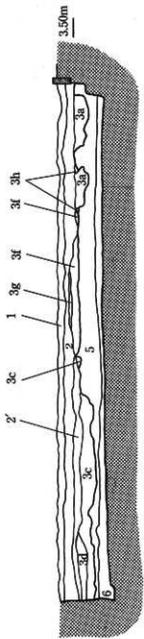
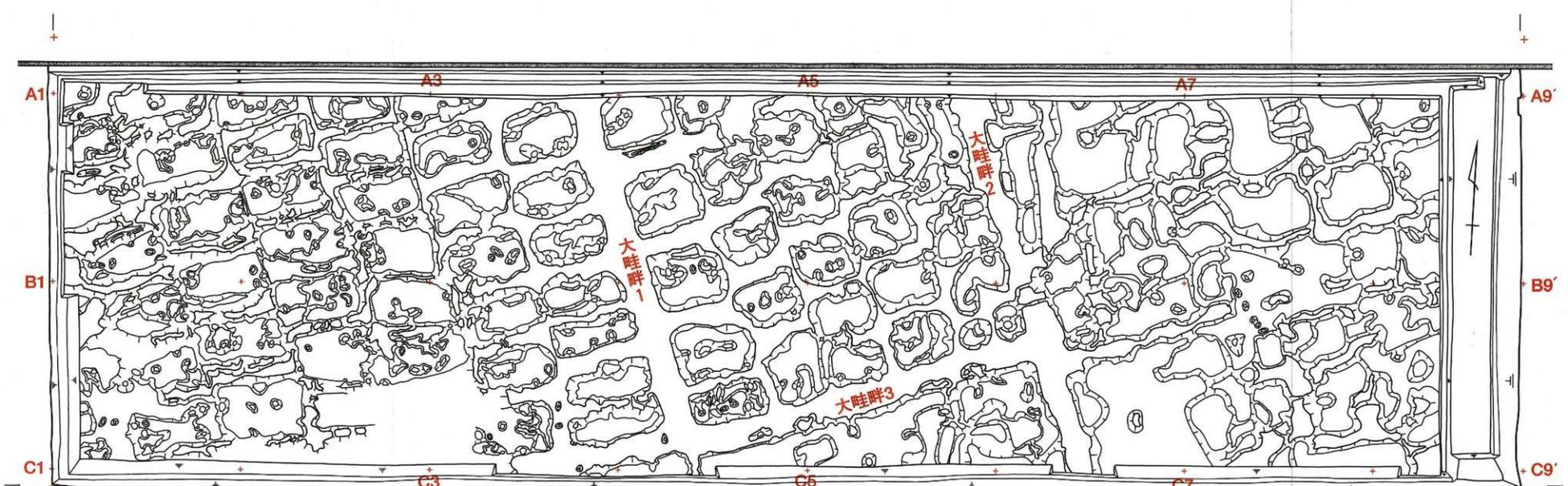
なお、調査区の範囲では畦畔を補強する板材や杭及び水路など灌漑施設は確認されていない。

6層以下の調査（第20図）

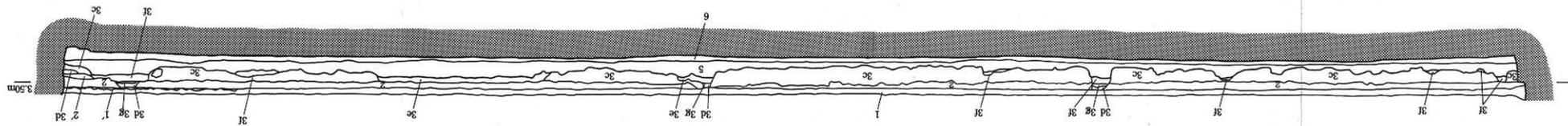
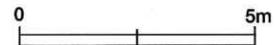
3区と2区は配置した位置が近いので、層位はほぼ対応している。2区では6層上面で遺構は確認できなかったが、3区は遺構の残りが良く検出できる可能性があったため、部分的に6層上面を精査し、遺構の有無を確認した。

6層上面で遺構検出を行った箇所はA1グリッドとB1グリッド、調査区南壁と東壁沿いの約1m

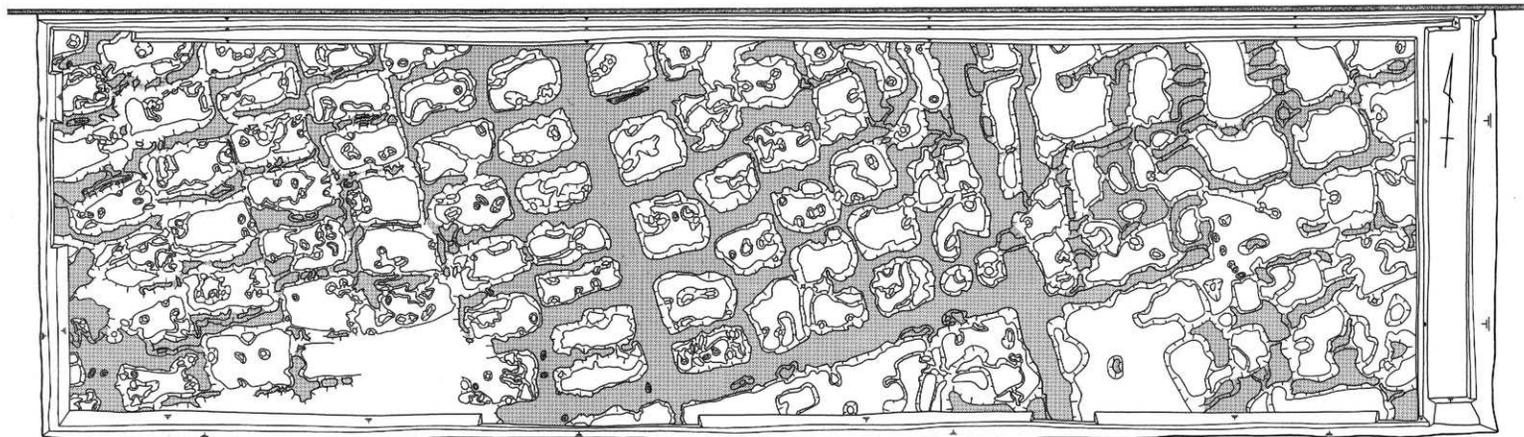
幅のサブトレンチである。結果は上面で少量の遺物が出土するものの遺構は検出できなかった。さらに下層については、調査区南東隅を深掘したが、2区と同じ層序が確認され、遺物も出土しなかったことから調査を打ち切っている。



- | | | | |
|-------------------|--------------------|--------------------|-----------------------|
| 0 褐色土(盛土) | 2' オリーブ黒色粘質土 | 3d 灰色砂(細砂, ラミナ構造) | 3h オリーブ黒色砂(中砂, ラミナ構造) |
| 1 灰黄褐色粘質土(耕作土) | 3a 灰色粘質土(細砂含む) | 3e 黄褐色砂(粗砂, ラミナ構造) | 5 黒褐色粘土 |
| 1' オリーブ黒色粘質土(耕作土) | 3b 灰色粘質土(細砂ブロック含む) | 3f 灰色砂(中砂, ラミナ構造) | 6 黒褐色粘土(暗い) |
| 2 オリーブ黒色粘質土(暗い) | 3c 灰色砂(混合砂) | 3g 黄灰色粘質土 | |

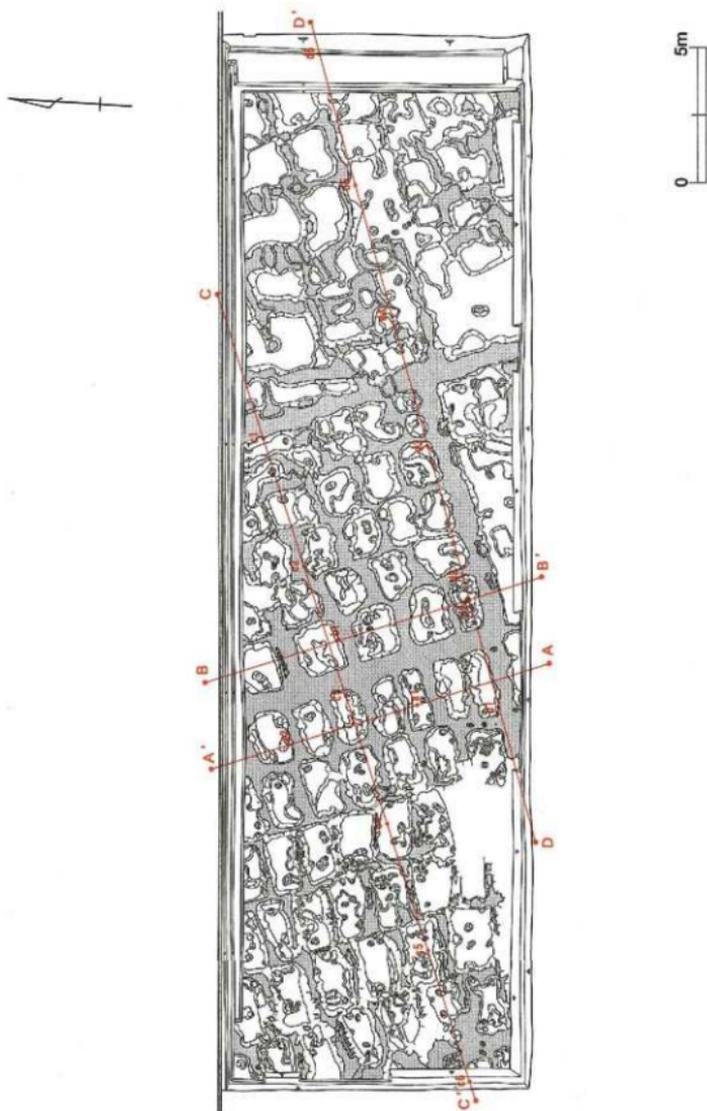


第14図 高岡遺跡3区遺構配置図 (1:80)

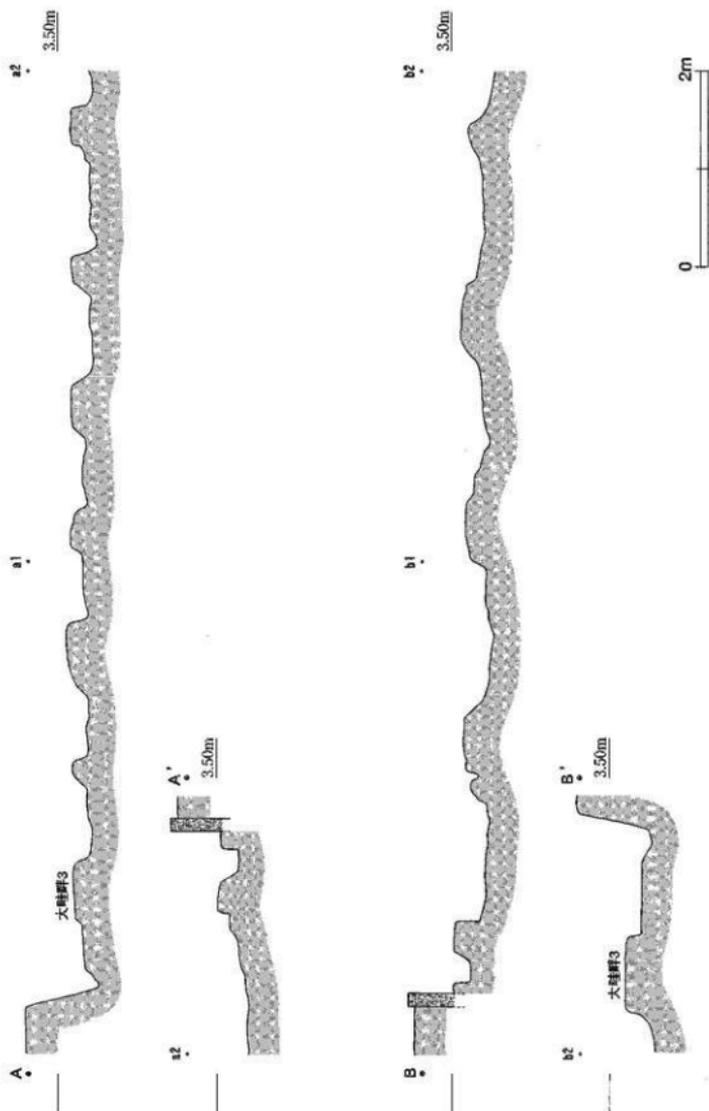


0 5m

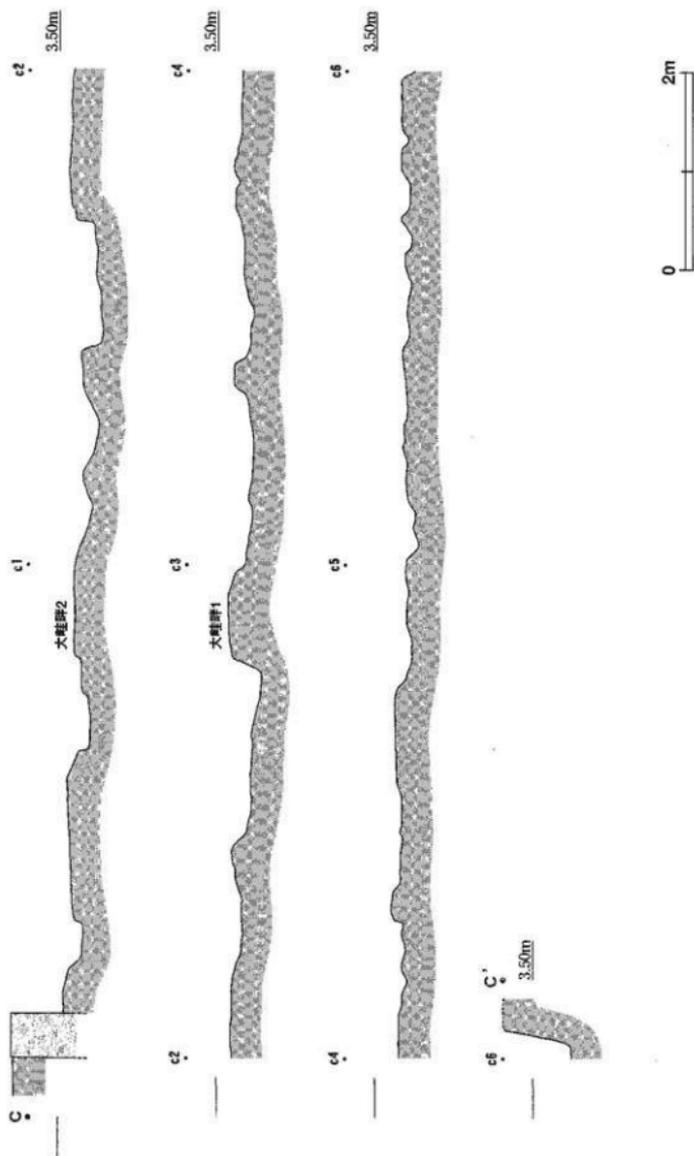
第15図 3区畦畔強調図 (1:100)



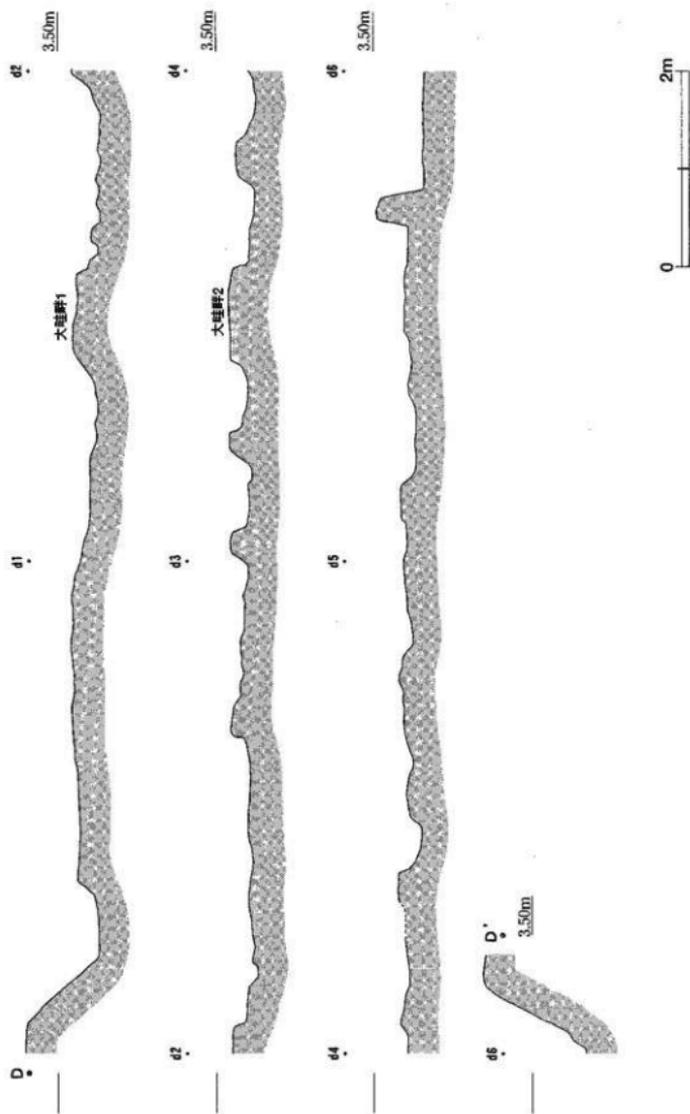
第16図 3区線構断面ライン配置図 (1:180)



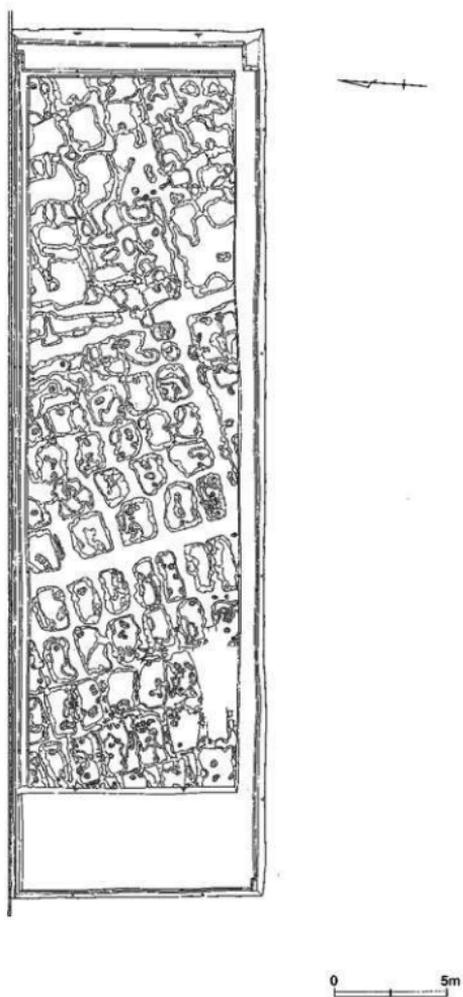
第17図 3区道構断面図1 (1:50)



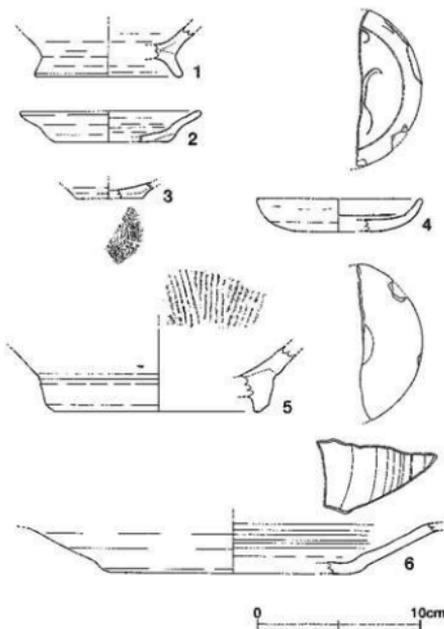
第18図 3区遺構断面図2 (1:50)



第19图 3区道路断面图3 (1:50)



第20図 3区調査最終状況図 (1:220)



第21図 3区出土土師器・陶磁器実測図(1:3)

出土遺物(第21・22図)

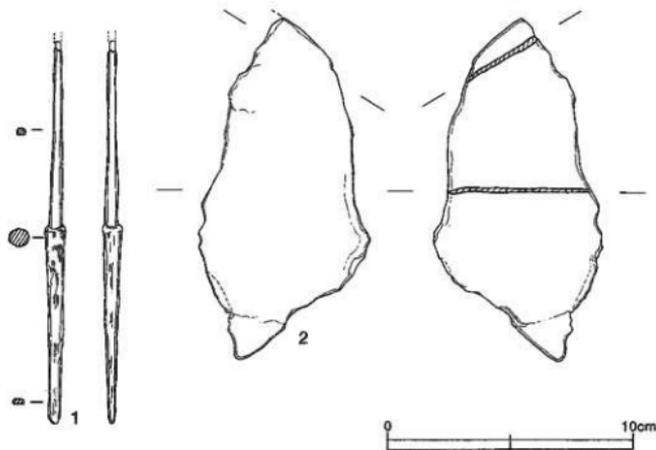
3区では土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、木片、炭が出土している。出土量はごく僅かで、全部でビニール袋1袋分に満たない。土師器と陶磁器の割合が大きく、その他は数点を数えるに過ぎない。なお、遺物が出土する層位は6層直上以上である。

土師器・陶磁器(第21図)

土師器で時期が推定できるものとして、21-1が挙げられる。底面に「ハ」字状に開く高い高台を有し、器壁も体部に向かい大きく開いている。6層直上から出土し平安時代のものである。陶磁器については、21-4に示す輸入品の白磁が鎌倉時代、21-5の陶器が江戸時代の所産である。両者とも遺構の埋土である3c層からの出土であることから、遺構の時期を推定するのに役立つ資料である。

鉄製品(第22図)

鉄製品は図示した2点だけ出土した。22-1は角錐と考えられる。刃部は断面四角形を呈し、着柄部は円形であるが、



端部付近で幅が狭まり扁平になる。22-2は不整形な薄い板状の鉄製品である。外縁に部分的に刃と思われる痕跡が残るが用途は不明である。両者とも6層直上で出土している。

第22図 3区出土鉄製品実測図(1:2)

第5章 高岡遺跡における花粉およびプラント・オパール分析

渡辺正巳(文化財調査コンサルタント)

はじめに

高岡遺跡は高根県中部、出雲平野の中央部に位置する。出雲平野は中国山地を源流に持つ斐伊川による沖積平野である。斐伊川は出雲平野を北流し北山山地(島根半島)にぶつかり流路を東に変え宍道湖に注ぐ。しかし近世以前には、西流し出雲市西部域に存在した「神門水海」を経て日本海に注いでいたことが判っている。

今回の調査地点は現在の斐伊川よりおよそ1.7km離れた地点であり、斐伊川西流時には、斐伊川からさらに近い地点であったと推定される。また、分析試料は斐伊川西流時の堆積物である。

また本報告は、高岡遺跡1区、2区の発掘調査に伴い出雲市教育委員会が川崎地質株式会社へ委託して実施した分析調査をまとめ直したものである。

試料について

分析試料は図1に示す2地点で、出雲市教育委員会(1区)および川崎地質株式会社(2区)により採取された。各地点の柱状図および層名、推定堆積時期を図2、3の柱状図に示す。ただし3層は、1、2区で同じ層名になっているが連続性が認められず、堆積時期が異なる可能性がある。

分析方法・結果

花粉分析処理は渡辺(1995)の方法により、プラント・オパール分析処理は藤原(1976)のガラスビーズ法により実施された。

観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じて600倍あるいは1000倍を用いて行われた。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行われた。プラント・オパール分析では、ガラスビーズが400個体以上になるまで検鏡が行われた。

花粉分析結果を図2、3に示す。花粉ダイアグラムでは、検出された種類毎に、木本花粉総数を基数とした百分率で示した。さらに、検出された針葉樹花粉、広葉樹花粉、草本花粉、胞子の割合を累積百分率で示した。また、検出木本花粉総数が極めて少ない2区試料No.7~12では、検出できた種類を「*」で示した。

プラント・オパール分析結果を図4、5に示す。プラント・オパールダイアグラムでは、1gあたりの含有数に換算した数を検出された種類毎に示した。1区の4試料、2区試料No.1、2ではタケ重

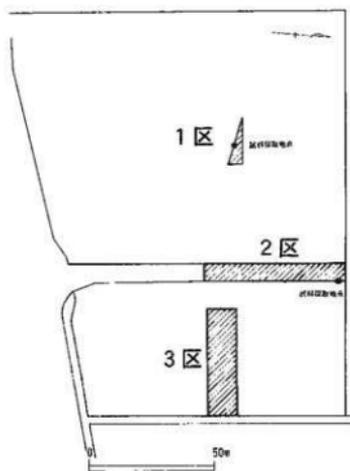


図1 調査区配置(試料採取地点)

科の細分が行われていたかった。一方2区試料No3～12ではタケ亜科の細分が行われていたことから、データの統一をはかるために2区試料No3～12ではタケ亜科合計と細分した結果の両方を示した。

花粉分帯

花粉組成の特徴、および各層の対比から、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

(1) II帯 (1区試料No4、2区試料No6)

マツ属(複維管束亜属)、スギ属が卓越するほか、アカガシ亜属、コナラ亜属が他の種類に比べ高率で出現する。

(2) I帯 (1区試料No3～1、2区試料No5～1)

マツ属(複維管束亜属)が卓越し、他に高率を示す種類はない。

既知の資料との比較

高岡遺跡南西方向に位置する小山遺跡では、およそ5000年前頃以降の花粉組成変遷が、断続的にはあるが得られている(渡辺・遠藤, 1998)。また南部の藤ヶ森南遺跡では弥生時代以降の花粉組成変遷が得られている(渡辺, 1999)。高岡遺跡の花粉組成変遷と両遺跡で得られた花粉組成変遷はよく一致する。

詳細に検討すると、高岡遺跡では出土遺物からII帯が奈良時代～平安時代の植生を示していると考えられるのに対し、両遺跡で対応する地域花粉帯は出土遺物や大西(1993)との対比から奈良時代頃までの植生を示していると考えられていた。したがって、出雲平野周辺ではスギ花粉出現率の高い時期が平安時代頃までは続いていた可能性が指摘できる。やや後代になるが中世(鎌倉時代後半)には出雲守護である塩冶氏が現出雲市塩冶町に居館を築き(藤岡, 1980)、周辺地域の開発を行ったと考えられている。中世における塩冶氏の街づくりのためにスギの伐採が行われたことが、I帯とII帯の間でのスギ属花粉の激減の原因の一つであると考えられる。

古植生変遷

ここでは、花粉分帯に対応する時期毎に、花粉分析結果および植物珪酸体分析より遺跡周辺の古植生を推定する。

(1) II帯期前(奈良～平安時代以前、弥生時代以降?)

花粉化石の含有量が少なく、相対的に胞子化石が卓越する。また、微量な炭状植物片が多量に含まれるなど、上位のI、II帯と堆積状況が異なった可能性が高い。斐伊川の氾濫に伴い堆積したと考えられるが、自然堤防や河原では「火入れ」が行われた可能性もある。植物珪酸体では、タケ亜科に分類されるササ類起源のものの検出量が多く、自然堤防や河原にはササ類が茂っていた可能性がある。一方、イネ起源の植物珪酸体も僅かではあるが検出され、遺跡近辺で稲作が行われていたことが判る。また稲作が行われていたことから、本層準(9～7層)は弥生時代以降に堆積した可能性が指摘できる。さらに試料No7、9からはクスノキ科の植物珪酸体が検出される。流れ込んだものと考えられ、調査地近くあるいは斐伊川流域にクスノキ科の樹木が生育していたことが解る。

(2) II帯期 (奈良～平安時代頃まで)

イネ科 (40ミクロン以上) の出現率が高いこと、イネの植物珪酸体が多量に検出される事から、遺跡内および周辺には水田が広がっていたと考えられる。一方で草本花粉の種類も量も上位のI帯期に比べて多く、イネを除くイネ科の植物珪酸体も多量に検出される。この傾向は、I帯下部の2区3、5層でも顕著に認められる。水田内、あるいは周辺の管理がI帯上部の1区1～3層、2区1～2'層が耕作土として使われていた時期に比べ劣っていたと考えられる。つまり、イネ科、オモダカ属、セリ科やキカシグサ科の雑草が水田内に、ヨモギ類やアブラナ科の雑草が畦などに生育していたと考えられる。

一方、得られた木本花粉の多くは中国山地や島根半島に由来すると考えられる。植生帯の垂直分布や現生植物の生態から考えると、シイ類、カシ類を主要素とする照葉樹林が中国山地低所および島根半島に分布していたと考えられる。一方で、人間の活動域に近い地域では二次林化が進み、アカマツ、ナラ類やシデ類を要素とする雑木林が分布していたと考えられる。また、山地縁辺部の谷筋や、扇状地の奥部にはスギ林が分布していたと考えられる。その他、モミ、ツガ、コウヤマキは中国山地高所に温帯針葉樹林を形成し、脊梁部にはブナ林が分布していたと考えられる。

(3) I帯期 (室町時代頃以降)

前述のようにI帯が塩治氏による出雲市内の開発以降の植生を示すと考えると、I帯期は室町時代頃以降を示すことになる。

前時期同様に、遺跡内から周辺には水田が広がっていたと考えられる。また前述のように、I帯上部が耕作土として使われていた時期には、それ以前に比べ管理が徹底していた可能性も指摘できる。

前述のように出雲市内の開発に伴いスギが伐採されたと考えられるが、山地縁辺部にはスギ林が若干残存していたと考えられる。また中国山地縁辺部および島根半島では二次林化がいっそう進み、アカマツ林やナラ類、シデ類を要素とする雑木林が広がったと考えられる。一方で、スギ林同様照葉樹林も山地縁辺部にわずかに残存していたと考えられる。また、中国山地高所の温帯針葉樹林、脊梁部のブナ林も残っていたことは明らかである。

まとめ

花粉分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 花粉分析結果から、本地域の花粉化石群集をI、II帯の2花粉帯に分帯できた。
- (2) 奈良時代から平安時代以降の遺跡周辺から中国山地にかけての古植生変遷を推定した。

引用文献

- 大西郁夫 (1993) 中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化. 地質学論集, 39., 33-39.
- 藤岡大拙 (1980) 後塩冶氏について. 出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書, 185-197, 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会編.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 渡辺正巳 (1995) 花粉分析法. 考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳・遠藤正樹 (1998) 出雲平野中央部小山遺跡における地質層序と古環境. LAGUNA(汽水域研究), 5., 21-223.
- 渡辺正巳 (1999) 藤ヶ森遺跡の花粉、植物珪酸体分析. 藤ヶ森南遺跡 出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一, 31-37.

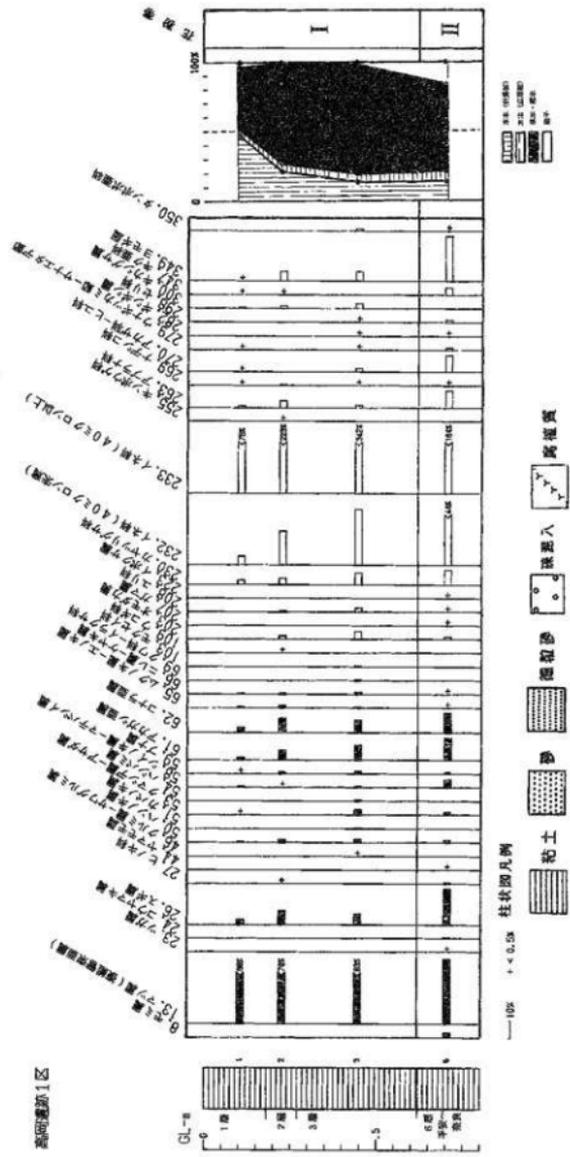


図2 1区の花粉ダイヤグラム

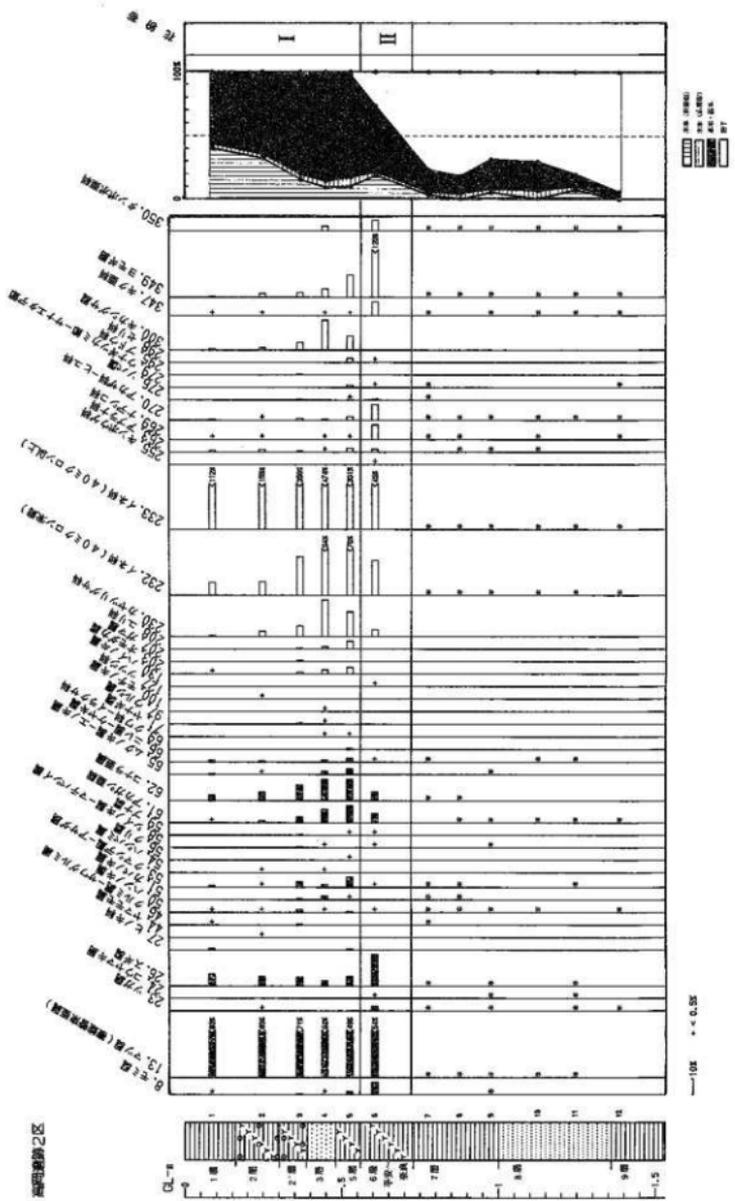


図3 2区の花巻ダイヤグラム

第6章 出雲市高岡遺跡から得られた珪藻遺骸群集に基づく古環境の推察

大塚 泰介 (鳥根大学汽水域研究センター)

はじめに

出雲市の高岡遺跡より得られた珪藻遺骸群集、および珪藻遺骸群集から推察される古環境について報告する。

高岡遺跡は、出雲平野北東部の微高地付近に位置する。かつて、出雲平野で西流し、日本海に注いでいた斐伊川により形成された旧自然堤防の後背湿地上の遺跡と考えられ、北には稲岡遺跡を望む。今回の調査対象となった高岡2区は、東西6m×南北50mの長方形の調査区である。表土から70cm掘削した標高3.2m付近から、畔状遺跡が多数検出されており、水田または畑の跡であったことが推察される。

試料および方法

表土より下方に向けて、約15cmごとに計12本の試料を採集した。試料採集は、発掘によって生じた垂直の壁面に、直径5cm、長さ5cmの真鍮パイプを打ち込む方法で行われた。この試料は瀬川崎地質によって花粉分析用に採集されたものである。土器の出土状況などから、6層（試料6）が奈良～平安時代に堆積したと推定される。

約2cmの試料を100mlビーカーにとり、まず1N塩酸を100ml加えて、沸騰寸前までホットプレート上で加熱した。加熱終了後、試料を超音波洗浄器で30秒ほど処理して試料を分散させ、蒸留水を加えて12時間静置後、上清をピペットで捨てた。次に10%過酸化水素水を約60ml加え、ホットプレート上で酸素の泡がとさんに出る程度に加熱し、約1時間保持した。加熱終了後、蒸留水を加えて6時間以上の静置沈殿後、上清を除く洗浄作業を5回繰り返した。最後に砂礫を除去して、洗浄試料を得た。

それぞれの洗浄試料を約40mlの蒸留水中に懸濁し、そのうち50 μ lをブルーラックスで封入して、永久プレパラートを作成した。永久プレパラートに含まれる珪藻遺骸を、総合倍率400倍で顕微鏡観察し、殻の中心を含むものと含まないものに分けて記録した。400倍で同定不可能なものは1,000倍で同定した。溶解や破損が著しく同定不可能な遺骸については、殻の中心を含むもののみ、その数を記録した。視野幅0.5mmでの走査を1mmおきに行うことで、永久プレパラートに含まれる珪藻のほぼ半数を計数した。ただし殻の中心を含む同定可能な珪藻が200殻を越えた場合には、その時点で計数を打ち切った。

結果

各試料の計数結果を表に示す。

1層は、多くの珪藻殻を含んでいた。優占種は*Pinnularia subcapitata* var. *elliptica* Krasske (= *P. subcapitata* var. *paucistriata* Grunow?) で、その相対頻度は20%であった。他に、*Placoneis undulata* (Østrup) Ohtsuka et Fujita, *Placoneis elginensis* (Gregory) Cox, *Sellaphora pupula* (Kützting) Mereschkowsky などの相対頻度が高かった。

2層から5層までに含まれた珪藻殻は少なく、また溶解されて厚い部分だけが残った殻の割合が多かった。同定可能な珪藻殻は、1層の試料ほど多かった。5層に含まれていた同定可能な珪藻のうち、

表 柱藻連続の計数結果。殻の中心が残っているもの(P)と残っていないもの(A)に分けて計数した。また、殻の中心が残っているものについては、溶解や破壊によって同定不可能なものも計数した。-は計数しなかったことを示す。

Layer	1	2	2'	3	5	6	7	8	8	9													
Sample	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12											
Presence or Absence of Valve Center	P	A	P	A	P	A	P	A	P	A	P	A											
<i>Achnanthes crenulata</i>	-	-	-	-	-	1	1	3	3	4	4	10	2	10	8	13	3						
<i>Achnanthes lapidosa</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-						
<i>Amphora copulata</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-						
<i>Biremis schwabei</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-						
<i>Caloneis bacillum</i>	5	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
<i>Caloneis stitula</i> var. <i>truncatula</i>	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>lineata</i> *	-	-	-	-	-	-	-	1	3	7	5	6	11	21	32	40	32	36					
<i>Cratichia cuspidata</i>	-	-	-	2	4	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Cymbella aspera</i>	-	-	-	-	2	1	-	-	-	2	1	-	1	-	1	1	3	-					
<i>Cymbella cuspidata</i>	-	-	-	-	8	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Cymbella tumida</i>	1	-	-	-	2	-	-	2	3	1	8	6	11	2	22	9	-	-					
<i>Cymbella turgidula</i> var. <i>turgidula</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Cymbella turgidula</i> var. <i>nipponica</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	5	-	6	-	-	-					
<i>Diatoma vulgare</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Encyonema minutum</i>	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1	-	4	-	-	-					
<i>Eunotia praerupta</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-					
<i>Epithemia turgida</i> var. <i>westermanni</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	2	1	-	1	-	-	-					
<i>Fragilaria intermedia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Frustulia rhomboidea</i> var. <i>crassinervis</i>	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Gomphonema quadripunctata</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Gomphonema rhombica</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	7	-	5	-	-	-	-					
<i>Gomphonema apiancio</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Gomphonema auricum</i>	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Gomphonema clevei</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	2	1	-	-	-	-	-	-					
<i>Gomphonema porvulium</i>	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Gomphonema</i> sp. 1 (cf. <i>punitum</i>)	-	-	-	-	-	-	-	2	1	2	6	3	-	-	-	-	-	-					
<i>Hantzschia amphioxys</i>	2	-	-	-	-	-	-	1	-	3	2	4	2	-	-	-	-	-					
<i>Luticola mutica</i> var. <i>intermedia</i>	1	-	-	-	-	-	-	1	4	2	7	5	-	-	-	-	-	-					
<i>Luticola</i> sp. 1 (cf. <i>mutica</i>)	3	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-					
<i>Neidium affine</i>	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Nitzschia amphibia</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Nitzschia frustulum</i>	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Nitzschia palea</i>	5	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Pinnularia borealis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-					
<i>Pinnularia brevistonii</i>	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Pinnularia interrupta</i>	6	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Pinnularia microstauron</i>	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Pinnularia</i> sp. 1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>elliptica</i>	40	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-					
<i>Pinnularia viridis</i>	3	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	3	2	-	-	-	-	-					
<i>Placoneis elginensis</i>	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Placoneis undulata</i>	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Reimeria sinuata</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	1	2	3	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	2	6	2	-	-	-					
<i>Rhopalodia gibba</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-					
<i>Sellaphora pupula</i>	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Surirella angusta</i>	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
<i>Synedra ulna</i>	-	-	-	-	1	7	-	3	22	4	16	5	50	3	64	10	96	-					
Others	56	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	10	2	8	1	18	6	-					
Unidentified	-	-	2	-	2	-	4	-	26	-	-	2	-	6	-	3	-	6	-	11	-	25	-

* ほかの変種をわずかに含む。

Cymbella cuspidata Kützing, *Craticula cuspidata* (Kützing) D. G. Mann, *Synedra ulna* (Nitzsch) Ehrenberg の割合が高かった。また、*Pinnularia* spp. のものと思われる溶解された殻が多く含まれていた。

6層に含まれていた珪藻はごく僅かだったが、それ以下では下方の試料ほど多くの珪藻を含む傾向が見られた。7層から9層、すなわち奈良～平安時代以前に堆積したと思われる層に共通して含まれていたのは、*Achnanthes crenulata* Grunow, *Cocconeis placentula* var. *lineata* (Ehrenberg) Van Heurck, *S. ulna* の3種であった。この3種の相対頻度は7層から9層までの全試料で高かった。*Cymbella tumida* (Brébisson) Grunow, *Luticola mutica* var. *intermedia* (Hustedt) の2種は、7層中部から9層までの各試料(試料8～12)に共通に、かつ比較的多く含まれていた。

考 察

この場所は発掘前まで水田であった。従って、地表近くの1層に含まれる珪藻は、大部分が水田に生育していたものと考えられる。1層で優占種だった*P. subcapitata* var. *elliptica* と同種と思われるものが、奈良 (Negoro & Higashino 1986)、大阪 (Ohtsuka & Fujita 投稿中) の水田から見出されている。また、*P. undulata*, *P. elginensis*, *S. pupula* は、いずれも日本の水田にごく普通の種である (小林1950, 根来1954, 金網1957, 1958, 1960, 1961, Negoro & Higashino 1986, 森 1999, Ohtsuka & Fujita 投稿中)。

植物珪酸体や花粉の分析結果から、この場所は5層が堆積した当時にも水田だったと考えられるが、珪藻の分析結果もこれを支持する。5層に多く含まれていた*Cr. cuspidata* は、日本の水田にごく普通である (小林1950, 根来1954, 金網1957, 1960, 1961, Negoro & Higashino 1986, 森 1999, Ohtsuka & Fujita 投稿中)。本種は河川や湖沼にも生息するが、一般に堆積物表生であり (Krammer & Lange-Bertalot 1986)、乾燥に対して耐性をもつ (Schmid 1979) ことから、水田のような環境に特に適応していると考えられる。*Cy. cuspidata* についても、水田から2例の報告があり (小林1950, 金網 1957)、他にも止水域からの報告が多い (Kobayasi & Ando 1977, Watanabe 1990, Shiono & Jordan 1995)。

筆者らは大阪の水田において、生きた珪藻群集の細胞数および種組成が季節変動するに伴って、珪藻遺骸の殻数および種組成も良く似た変動を示すことを観察した (大塚・藤田 未発表)。この観察結果および本研究の結果から、現代の水田における珪藻殻の分解速度が大きいことが推察される。一方、森 (1996, 1999) の報告を見る限り、弥生および古墳時代の水田遺跡から同定可能な珪藻殻を十分に得られることは少なくないようである。以上から、珪藻遺骸の分解は、古い時代の水田の方が、近代の水田よりも進みにくかった事が推察される。この推察に従えば、2層から5層にかけて、年代の新しい上方の試料ほど同定可能な珪藻殻の数が少なかったことが説明できる。ただしその一般性および原因については、今後、十分に検討する必要がある。

7層から9層、すなわち奈良～平安時代以前に堆積したと思われる層に多く出現した5種の珪藻のうち、*C. placentula* var. *lineata*, *S. ulna* および *C. tumida* は、いずれも水質汚濁が著しくない河川、湖沼にごく普通の種である。このうち *C. placentula* var. *lineata* は、止水よりも河川に多く出現し (小林 1995)、水生植物上に特に多い (大塚 1998)。*A. crenulata* は熱帯に多く分布する種 (Hustedt 1937-1939, 津村・岩橋 1955) で、河川上流部からの報告が多い (Hustedt 1937-1939, 渡辺 1957, 辻 1995)。*L. mutica* var. *intermedia* の生息環境は明らかでないが、日本では銅路湿原からの報告があり (Togashi & Ichimura 1997)、近縁種には陸生および汽水性のものが多い (Hustedt 1961-1966, Krammer & Lange-

Bertalot 1986)。低平地において、以上の種が共存する環境条件を考える事は難しい。また、7層と9層は粘上の試料であるにもかかわらず、堆積物表生の種が少ない。したがって、7層から9層に含まれていた珪藻遺骸の大部分は、他生的、すなわちこの場所以外で生育していたと考えられる。

7層から9層より出土する珪藻遺骸の大部分は、斐伊川の氾濫によってもたらされたと私は考える。*C. placentula* var. *lineata*, *S. ulna*および*C. tumida*は、いずれも現在の斐伊川中流域に普通である(日下部 1973, 大塚 未発表)。*A. crenulata*は河口域でも発見されることがある(山川 1994)が、これは他の河川珪藻に比べて殻が厚く、遺骸が残りやすいためと考えられる。一方、*L. mutica* var. *intermedia*など数種については、湿地の堆積物表生藻あるいは気生藻として、氾濫原に生育していた可能性がある。

6層から9層までの間では、下層ほど珪藻遺骸を多く含む傾向が見られた。これは、時代が新しくなるにつれて河川との標高差が大きくなり、洪水によって珪藻殻がもたらされることが少なくなったためと考えられる。

まとめ

出雲市の高岡遺跡より得られた珪藻遺骸群集をもとに、堆積当時の環境を推察した。植物珪酸体および花粉の分析結果によれば、この場所は奈良~平安時代以降、水田であった可能性が高いが、珪藻分析の結果もこれを支持する。それ以前の層からは多くの河川珪藻が見出されており、氾濫原だった可能性が示唆された。また6層以下では、下方ほど多くの珪藻を含む傾向があったことから、古い時代ほど洪水によって珪藻殻がもたらされる頻度が高かったことが推察された。

引用文献

HUSTEDT, F. (1937-1939): Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Archive für Hydrobiologie, Supplement 15: 131-177, 187-295, 393-506, 638-790, 16: 1-155, 274-394.

- (1961-1966): Die Kieselalgen, 3. Teil. - In: Dr. L. Rabenhorst's Kryptogamen-Flora von Deutschland, Österreich und der Schweiz 7c: 1-816. Akad. Verlag., Leipzig.

金網善恭 (1957): 京都および近郊の水田産珪藻(1). 藻類 5 : 76-79.

- (1958): 京都および近郊の水田産珪藻(2). 藻類 6 : 23-27.

- (1960): 豊橋市の海岸干拓田におけるツツミモとケイソウについて. 陸水学雑誌 21 : 73-76.

- (1961): 豊橋市西方部にある二小島(大津島と大崎島)の水田産ケイソウとツツミモ. 藻類 9 : 1-8.

小林弘 (1950): 三重県上野市近郊水田内の珪藻および接合藻チリモ科フロラ. 陸水学雑誌 14: 195-204.

- (1995): 羽状目. 環境生物図鑑(小島貞夫・須藤隆一・千原光男編); 236-298, 誠談社, 東京.

KOBAYASI, H. & K. ANDO (1977): Diatoms from irrigation ponds in Musashikyuryo-shinrin Park, Saitama Prefecture. Bulletin of Tokyo Gakugei University Series IV 29: 231-263.

KRAMMER, K. & H. LANGE-BERTALOT (1986): Bacillariophyceae 1. Teil: Naviculaceae. In: S wasserflora von Mitteleuropa (H. Ettl, J. Gerloff, H. Heynig & D. Mollenhauser eds.) 2/1: 1-876. Fischer. Stuttgart & New York.

森勇一 (1996): 愛知県朝日・西志賀遺跡(弥生時代)の環藻および溝中より得られた珪藻遺骸群集.

珪藻学会誌 12 : 69-73.

- (1999): 先史～歴史時代の地層中の珪藻遺骸群集と古環境復元への応用. 珪藻学会誌 15 : 127-147.

根来健一郎 (1954): 紀州水田産藻類. 1. 和歌山市毛見水田の珪藻. 南紀生物 5 : 1-4.

NEGORO, K. & M. HIGASHINO (1986): Diatom vegetation of paddy fields in Japan. Report I. Diatom vegetation of paddy fields in the vicinity of Sakurai City, Nara Prefecture. Diatom 2: 1-8.

大塚泰介 (1998): 河川の形態単位内における付着藻類群落, 特に珪藻群落の生息場所による違い. 陸水学雑誌 59 : 311-328.

OHTSUKA, T. & Y. FUJITA (投稿中): Diatom flora and its seasonal changes in a paddy field in Central Japan. Nova Hedwigia.

SCHMID, A. M. (1979): Influence of environmental factors on the development of the valve in diatoms. Protoplasma 99: 99-115.

SHIOMO, M. & R. W. JORDAN (1995): Recent diatoms of Lake Hibara, Fukushima Prefecture. Diatom 11: 31-63.

TOGASHI, T. & T. ICHIMURA (1997): Diatom Flora in Kushiro Mire, Hokkaido. Diatom 13: 129-145.

津村孝平・岩橋八洲民 (1955): 淡水産球藻 *Achnanthes circunlata* について. 藻類 3 : 57-66.

辻彰洋 (1955): 浦内川 (沖縄県西表島) の珪藻植生. 珪藻学会誌 11 : 89-92.

渡辺仁治 (1957): 奈良県月瀬村龍王の滝の藻類相について. 陸水学雑誌 19 : 45-50.

WATANABE, T. (1990): Attached diatoms in Lake Mashuu and its value of the diatom assemblage index of organic water pollution (DAIpo). Diatom 5 : 21-31.

山川清二 (1994): 嘉瀬川河口の珪藻. 珪藻学会誌 9 : 41-72.

第7章 まとめ

今回の調査では、出土遺物が少なく遺構の検出状況も良好ではない。したがって、各調査区単位ではデータが少なく言及できなかったことが多々あったため、調査結果全体を見渡し、かつ、微化石分析結果もふまえ、下記の項目に沿って所見を述べまとめとしたい。

遺跡の時期・性格について

今回の調査全般にわたり古墳時代以前の遺物は出土しないため、遺跡の出現期は早くても奈良時代と考えられる。また、平安時代と中・近世のものが相対的に多く出土しており、中でも平安時代のものが高い割合を占めることから、調査地付近は平安時代に中核期を迎え、中・近世に至るまで人々の生活に利用されていたことが考えられる。

検出された水田跡は、その位置関係から稲岡遺跡に付随するものと考えられる。つまり、調査地付近は、稲岡遺跡に集落を営む人々の生産の場として利用されていたものと思われる。

出土土器について

今回の調査で出土した土器片は、いずれも小片で磨滅も著しいものが多かった。この残存状態からこれらは水田域に持ち込まれたものとは考えにくい。2区の調査においては、調査区北寄りでの出土量が多く、南に向かうに従って減少する傾向にある。さらに、調査区東壁端面を観察しても、北端と南端では約20cmの標高差が認められ、南に向かうにつれて標高が下がっている。よって、今回の調査で少量ながら出土した遺物は、稲岡遺跡からの流れ込みによるものと推定できる。

畝状遺構について

今回の調査では、1区と3区で水田遺構、2区で畝状遺構を検出している。調査区があまり離れていないにも関わらず、一見、2区は異なったものにも受け取れる。しかし、検出した畝状遺構は、その伸びる方向が3区の畦畔方向と合致することから、本来水田跡であったものが破壊され現在の形状になったと判断できる。破壊の原因としては、2区の真上に通じていた舗装が施されていない道路の影響を受けたと考えられる。

水田遺構の時期区分について

今回検出した水田遺構の時期は二期に分けられよう。つまり、1区検出のものを第一期、2区及び3区検出のものを第二期とすることができる。第一期は平安時代を中核期とし6層に掘り込まれており、第二期は中・近世に5層に築かれている。この時期設定については検出面上で出土する土器片をもとに行っているが、1区出土の土器はごく小片であり時期が明確でないため、2区と3区の6層上面で出土する土器から推定している。6層は標高及び土質を考慮し、調査区付近一帯に堆積していると考えて良いと思われる。なお、第二期については微化石分析の結果、空町時代以降の可能性が高い。

水田の継続性について

3区の畦畔断面の観察では上部で砂のラミナ構造が確認できた。これは斐伊川の氾濫による洪水があったことを示唆するもので、調査地付近が後背低地であるという位置環境とも合致する。第一期と第二期では時間的な隔りがあるが、水田を管理していた集団、おそらく稲岡遺跡に集落を構えてい

た人々は、幾たびか洪水の被害を受けながらも継続的に営んでいたのではないと思われる。

稲岡遺跡の消長は調査地付近と合致することが予想されるため、水田の継続性については、稲岡遺跡の消長の検討を重ねることである程度把握できると考えられる。

遺跡出現の契機について

出雲平野に多数の集落が出現する時期は弥生時代中期であるが、調査地付近は前述のとおり、早くても奈良時代であり時期差がある。微化石分析の結果と出土した上限遺物を勘案すると、7～9層は弥生時代から古墳時代の間に堆積したと推定できるが、同層からは遺構、遺物が検出できない。これはこの時期にはまだ土地が安定せず人が住める環境でなかったためと考えられる。

斐伊川の営力によって氾濫原が形成される過程で、調査地付近が洪水の影響をたやすく受けないような比較的安定した微高地に成長するのは、出雲平野の他所より遅かったと推定され、遺跡の出現期も遅れたと考えられる。

土器 観 察 表

採り番号	器 種	出土地点	口径(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①粘土 ②施文 ③色割(地)	備 考
7-1	土師器 杯	1区 Aライン(サクレ)	口径 7.3	平底。	底部 外唇: 凹転糸切り 内唇: 凹転ナデ	①南 ②青濁 ③にぶい黄褐色	反転復元。
7-2	土師器 杯	1区 A4Gr 6層上唇	高台径 6.8	底面に「ハ」字状に深く高台を盛り付け、上唇縁状に仕上げられる。高台は先筒りの断面を呈する。	底部 外唇: ナデ 内唇: 凹転ナデ	①0.5cm以下の砂粒を含む ②青濁 ③灰青色	反転復元。
7-3	土師器 杯	1区 3W02	高台径 6.0	底面に「ハ」字状に深く高台を盛り付け、上唇縁状に仕上げられる。高台は先筒りの断面を呈する。	底部 外唇: 不明 内唇: ナデ	①砂粒をあまり含まず青濁 ②青濁 ③にぶい黄褐色	反転復元。
7-4	灰土器 器?	1区 A4Gr 5層	不 明	外壁に平行タタキ目、内面に同心円状のオキス模あり。	胴縁 外唇: タタキ (叩き模) 内唇: オキス (立て具)	①1.5cm以下の砂粒を含むが青濁 ②青濁 ③灰色	
7-5	灰土器 器?	1区 A4Gr 6層上唇	不 明	外壁に格子状のタタキ目、内面に同心円状のオキス模あり。	胴縁 外唇: タタキ (叩き模) 内唇: オキス (立て具)	①まれに5mm次の硝を含むが青濁 ②青濁 ③灰色	
10-1	土師器 杯	2区 11704719 6層上唇	口径 10.7 底径 5.0 (鑑定)	器底は底面から口縁部にかけて外反気味に凹口する。体部内外面に赤色塗彩を呈す。9世紀?	底部 内外唇: 凹転ナデ?	①1cm以下の砂粒を含む ②青濁 ③にぶい黄褐色	反転復元。
10-2	土師器 杯	2区 B10Gr 5層	口径 6.4	平底。底面を強くナデつけ若干絞る。	底部 内外唇: 凹転ナデ 胴縁 外唇: 凹転糸切り 内唇: ナデ	①まれに0.5mmの砂粒を含むが青濁 ②青濁 ③灰黄色	反転復元。
10-3	土師器 杯	2区 B10Gr 5層	口径 7.0	平底。器底は底面から体部に向けて若干内反気味に凹口する。	底部 内外唇: 凹転ナデ? 胴縁 外唇面: 不明	①1cm以下の砂粒を含む ②やや不貞 ③褐色	反転復元。
10-4	土師器 杯	2区 A9Gr 5層	高台径 6.9	底面縁部に「ハ」字状に深く高台を盛り付ける。	底部 内外唇: ナデ 胴縁 外唇: ナデ折し? 内唇: ナデ	①0.5cm以下の砂粒を含む ②やや不貞 ③灰青色	反転復元。
10-5	土師器 杯	2区 A9Gr 5層	高台径 5.6	底面縁部に「ハ」字状に深く高台が付く。	底部 内外唇: ナデ	①砂粒をあまり含まず青濁 ②青濁 ③灰青色	反転復元。
10-6	土師器 杯	2区 B10Gr 6層上唇	高台径 5.2	器底は底面から体部にかけて直線的に開口する。底面縁部に「ハ」字状に深く高台を盛り付ける。11世紀?	底部 内外唇: 凹転ナデ 胴縁 外唇: ナデ折し? 内唇: ナデ	①2mm以下の砂粒をやや多く含む ②青濁 ③にぶい黄褐色	反転復元。
10-7	土師器 杯	2区 A2Gr 6層上唇	高台径 7.6	底面外唇やや内唇部に「ハ」字状に深く高台を盛り付ける。11世紀?	底部 内外唇: 凹転ナデ 胴縁 外唇面: ナデ	①1cm以下の砂粒を含む ②青濁 ③灰白色	
10-8	土師器 器	2区 A10Gr 5層	口径 5.0	平底。底面を強くナデつけ絞る。	底部 内外唇: 凹転ナデ 胴縁 外唇: 凹転糸切り 内唇: ナデ	①まれに3mm次の硝を含むが青濁 ②青濁 ③灰黄色	反転復元。
10-9	土師器 器	2区 A6Gr 5層	口径 4.9	平底。底面を強くナデつけ若干絞る。	底部 内外唇: 凹転ナデ? 胴縁 外唇: ナデ折し? 内唇: 不明	①まれに3mm次の硝を含むが青濁 ②やや不貞 ③にぶい黄褐色	反転復元。
11-1	土師器 器	2区 A9Gr 5層	口径 11.3	器底は底面から大きく外反した後に口縁縁部付近で底面を凹口する。	口縁部 内外唇: 凹転ナデ	①0.5cm以下の砂粒を含むが青濁 ②青濁 ③褐色	反転復元。

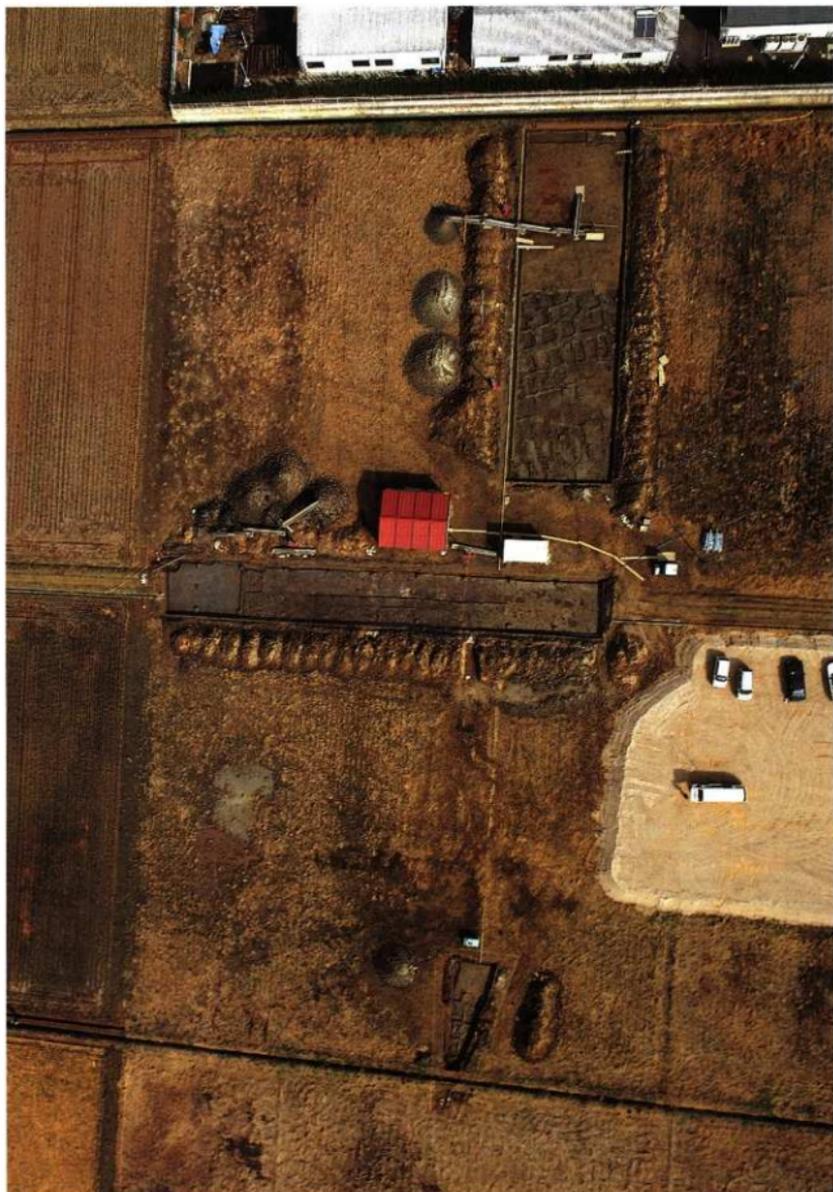
詳細番号	器 種	出土地点	法長 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土 ②施彩 ③色票(地)	備 考
11-2	須恵器 赤絵杯	2区 A6Gr 3層	底径 5.6	平底。器壁は底部から外縁に向けて内湾して立ち上がる。底面外縁に襷をなす。	器部 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転赤切り後ナデ 内面：回転ナデ	①1.5cm以下の砂粒を含む ②青濁 ③灰白色	反転復元。
11-3	須恵器 杯	2区 A4Gr 3層	底径 36.0	平底。底面外縁に襷をなす。	器部 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転赤切り 内面：回転ナデ	①1.5cm以下の砂粒を含む ②青濁 ③灰白色	反転復元。
11-4	須恵器 杯	2区 B3Gr 3層	不 明	底面外縁に「ハ」字状に隅くり付け高台を有したと思われる。	器部 外面：ナデ 内面：回転ナデ 外面：ハケ 内面：ケズリ	①1cm以下の砂粒を含む ②やや青 ③灰白色	反転復元。
11-5	須恵器 杯	2区 A7Gr 3層	底径 10.0	平底。	器部 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転赤切り後ナデ 内面：ナデ	①細密 ②不良 ③灰白色	反転復元。
11-6	須恵器 杯	2区 B-10Gr 3層	不 明	底面外縁に隅り付け高台が割離した状態有り。	器部 外面：回転ナデ 内面：ナデ	①細密 ②良 ③灰白色	反転復元。
11-7	須恵器 杯	2区 B10Gr 6層上層	高台径 9.4	底面外縁に高台を隅り付ける。高台直縁？	器部 外面：ナデ消し？ 内面：ナデ	①2mm以下の砂粒をやや多く含む ②青濁 ③灰白色	反転復元。
11-8	須恵器 杯	2区 A10Gr 6層上層	高台径 8.6	底面外縁やや内湾りに高台を隅り付ける。高台直縁に凹線状の彫り有り。器壁の立ち上がりは急である。高台直縁？	器部 内外面：回転ナデ 底部 外面：不明 内面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②やや青 ③灰白色	反転復元。
11-9	須恵器 杯	2区 A2Gr 3層	高台径 8.6	底面外縁やや内湾りに高台を隅り付ける。高台直縁？	器部 外面：回転赤切り後ナデ 内面：ナデ	①4mm以下の砂粒をやや多く含む ②不良 ③灰白色	反転復元。
11-10	須恵器 杯	2区 A10Gr 6層上層	高台径 8.2 (推定)	底面外縁に高台を隅り付ける。器壁は底部から外縁にかけて直線的に立ち上がる。高台直縁？	器部 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転赤切り 内面：ナデ	①1.5cm以下の砂粒を含む ②やや青 ③灰白色	反転復元。
11-11	須恵器 杯	2区 B9Gr 5層	高台径 9.8	底面外縁に高台を隅り付ける。器壁は底部から外縁に向かう直線的に立ち上がる。高台直縁？	器部 内外面：回転ナデ	①まれに1mm程度の窪を含む ②青濁 ③灰白色	反転復元。
12-1	陶 器 壺	2区 A4Gr 3層	不 明	器壁は下方でややすぼまる。	器部 内外面：回転ナデ	①まれに5mm程度の窪を含む ②やや青 ③濃い橙褐色	磨製式。 反転復元。
12-2	陶 器 壺?	2区 A3Gr 3層	不 明	平底。器壁は厚く、器壁は薄い。	器部 外面：不明 内面：回転ナデ 底部 外面：不明 内面：回転ナデ	①1.5cm以下の砂粒を少し含む ②やや青 ③灰白色	磨製式?
12-3	磁 器 皿	2区 A5Gr 3層	高台径 7.6	底面に削り出し高台を有する。内面、高台の付け根外縁、器部外縁に彫の付け有り。	器部 内外面：旋削 底面 内外面：旋削	①細密 ②良 ③地：灰白色	輸入品。 反転復元。
12-4	磁 器 皿	2区 表土	高台径 7.8	底面に削り出し高台を有する。内面に彫り付け有り。	器部 内外面：旋削 底部 外面：一級磁石 内面：旋削	①細密 ②良 ③地：灰白色	肥前系。 反転復元。

押込番号	器 種	出上地点	寸法(cm)	形状・支保の特徴	手洗の特徴	①筋1: ②成皮 ③色調(地)	備 考
21-1	土器器 平	3区 A2Gr 6層上直	高さ 8.7	底面外縁に「ハ」字状に深く高台を切り 付ける。11世紀?	鉢部 内外面: 同転ナデ 底部 内外面: ナデ	①2cm以下の砂粒を含む ②成皮 ③濃い黄褐色	反転復元。
21-2	土器器 皿	3区 A1Gr 5層	口径 10.9 底径 6.7 器高 1.9	平底。器壁は鉢部中ほどで器面を突え開 口する。	口縁部・底部 内外面: 同転ナデ 底部 外面: 不明 内面: 同転ナデ	①0.5cm以下の砂粒を含むが青 ②成皮 ③濃い黄褐色	反転復元。 内面に葉が付着 する。
21-3	土器器 皿	3区 A1Gr 3c層	底径 4.0	平底。底面外縁に溝をなす。	鉢部 外面: 同転赤部り 内面: 同転ナデ	①0.5cm以下の砂粒を含む ②成皮 ③濃い黄色	反転復元。
21-4	土器器 皿	3区 A6Gr 3c層	口径 10.0 底径 4.0 器高 2.0	器壁は底部から口縁部にかけて薄直上開 口する。内面に支脚有り。12世紀末~13 世紀。	口縁部・底部 内外面: 施性 底部 外面: 軸を抜き取る 内面: 施性	①成皮 ②成 ③灰白色 地: 灰白色	輸入品説。 反転復元。
21-5	土器器 鉢	3区 A5Gr 3c層	底径 12.4	底面に彫り付け高台を有する。高台の臺 座の外側に曲取を施す。1単位7余以上の 溝い条線を内面に施す。	鉢部・底部 外面: ナデ	①2cm以下の砂粒を含む ②成皮 ③成黄褐色	反転復元。
21-6	土器器 皿	3区 B5Gr 3c層	底径 14.5	器壁は底部から大きく開く。高台の付く 可能性有り。18世紀。	鉢部・底部 外面: 成性 内面: 施性	①成皮 ②成 ③成 灰白色 地: 灰白色	反転復元。

鉄 製 品 観 察 表

押込番号	器 種	出上地点	遺存状態	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
13-1	遮刀環	2区 A8Gr 6層上直	一部欠	鉄	7.3	0.8~1.7	0.2	9	形状は先端に尖づくに従って狭まる。先端付近で刃部が 彎曲している。柄部は身をゆるく湾曲させる。
22-1	角皮	3区 A1Gr 6層上直	ほぼ完	鉄?	15.6	0.2~0.8	—	18	先端を欠入、断面は4角形を呈する。溝部は断面同形を 呈するが、溝部付近で扁平になる。
22-2	不明	3区 A1Gr 6層上直	一部欠	鉄	13.9	6.9	0.2	56	不整形な鉄杖。外縁に部分的に刃と思われる箇所有り。

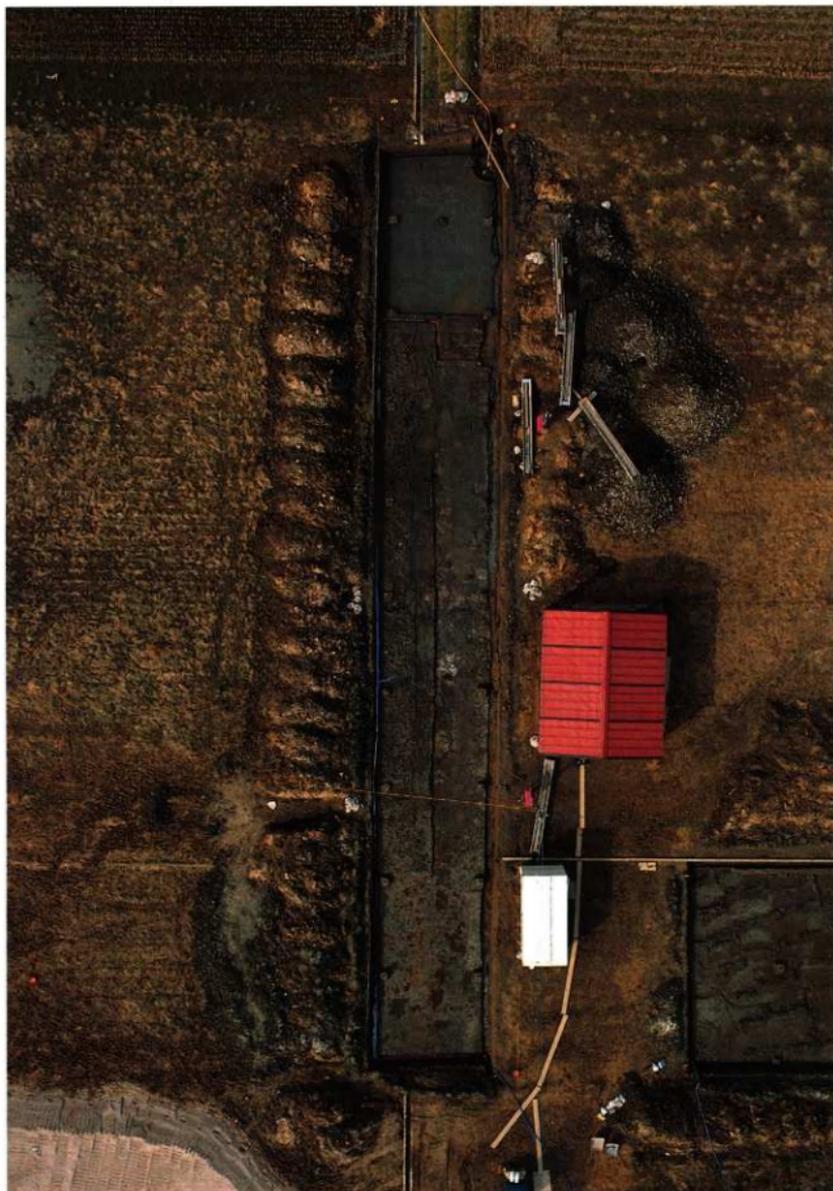
写真図版



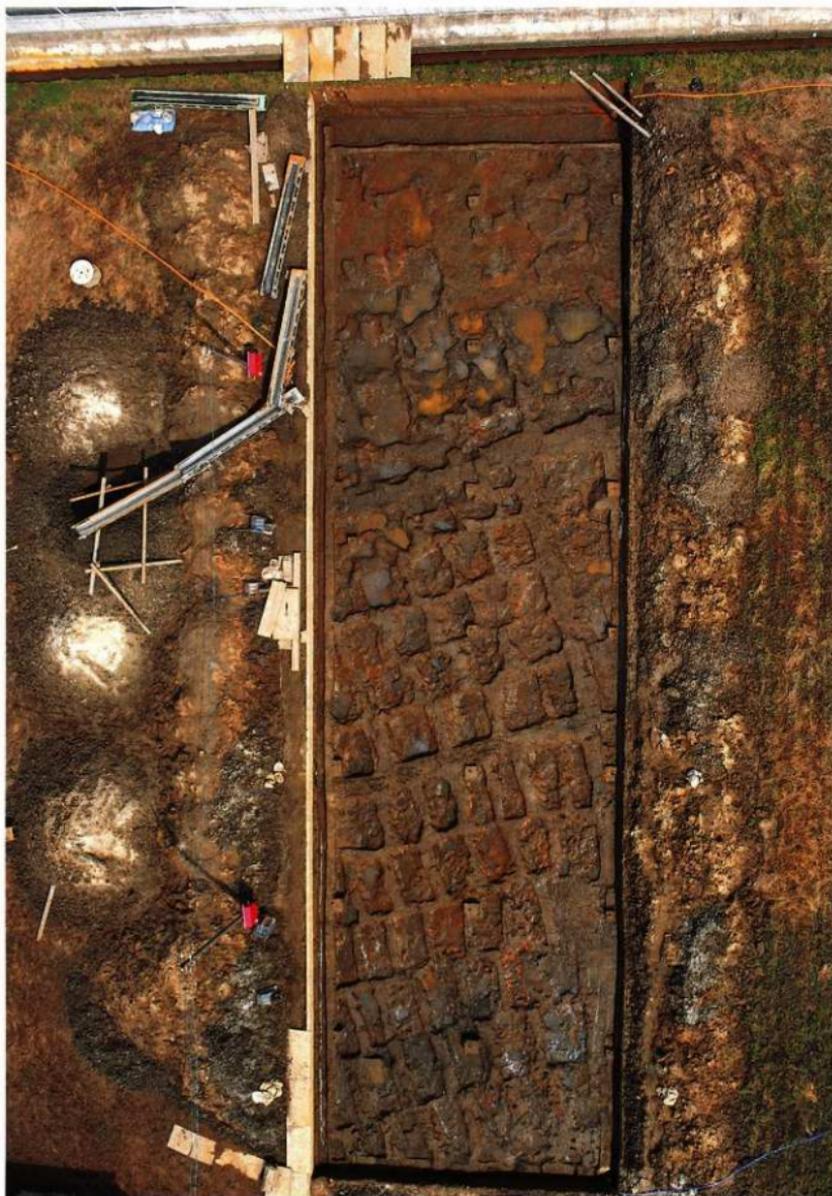
高岡遺跡調査区全景（上から）



高岡遺跡1区全景 (上から)



高岡遺跡 2区全景 (上から)



高岡遺跡3区全景 (上から)



1 1区調査着手状況（西から）



2 1区調査風景（南東から）



1 1区遺構検出状況（東から）



2 1区完掘状況（東から）



1 1区遺構検出状況：SW03付近（北から）



2 1区遺構完掘状況：SW03付近（北から）



1 1区遺構検出状況：SW10付近（北から）



2 1区遺構完掘状況：SW10付近（北から）